
バトルスピリッツ 激震の勇者

ブラスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルスピリッツ 激震の勇者

【Nコード】

N6404X

【作者名】

ブラスト

【あらすじ】

主人公達が住む町は陽昇マヒルという男が作ったリアルバトルフィールドでみんな楽しくバトルスピをやっていた。だが、その街である少年少女たちを巻き込んだ事件が起ころうとしていた。

バトルスピリッツ激震の勇者 キャラ紹介（前書き）

この話は、今放送中のアニメ「バトルスピリッツ覇王」と所々接点があります。

また、そのバトルスピリッツ覇王のキャラが小説に登場させようと思ってるので是非ご期待ください！

バトルスピリッツ激震の勇者 キャラ紹介

初めまして！ブラストと申します。

今日からバトルスピリッツの小説を書いていきたいと思っています。

私は初心者なので、皆様の小説と比べたら面白みのない小説になるかもしれませんが、温かい目で見守っていただくと嬉しい限りです。

まずは早速キャラ紹介から書いて行こうと思います。

・若槻和人（わかつきかずと）

本作品の主人公。15歳の少年で赤デッキの使い手。

キースピリットの「剣皇龍エクスキャリバス」を相棒と呼び、様々なカードバトラーと戦う。

・木野咲（きのさき）

和人とは幼馴染で、15歳の女の子。

緑デッキを使うが、まだまだバトスピ経験は浅い。

・来道リクト（らいどうりくと）

15歳の少年、白デッキの使い手。木野や和人とは大の仲良し。

昨年ガンスリンガーで川村と戦うが、惜しくも敗れる。

・川村劉（かわむらりゅう）

昨年のガンスリンガーを好成績で通過した15歳の少年（？）。

青デッキの使い手で、粉碎などをメインとした攻めで相手をデッキアウトにさせる。

ただひたすらに強さに拘り、誰かに頼るのを嫌う。

以上4人のキャラ紹介です！

「エクスキャリバス」など少し古めのカードを紹介していますが、
勿論バーストなどの最新カードも話に登場させようと思ってます！

これからぜひよろしくお願いします！

第1話『出会いの始まり』（前書き）

はい！やっとな話が出来！

そして一話目から現在放送中のアニメ、バトルスピリッツ覇王のあのキャラが登場！面白いかどうかは不安ですが、ぜひ見てみてください。

第1話『出会いの始まり』

『メインステップ!』

とあるテレビ画面でバトルスピリッツで対戦している二名の人物が映される。一人は帽子をし、その帽子からはみ出した髪は青色の少年らしき人物。もう一人は白デッキを使っている、金髪の少年。

今の状況は互いのライフが三で白デッキの男の場には機人フィアラルLv.2と翼神機グランウオーデンLv.2が一体ずつ。もう一人の場にはグランガッチ、ロックゴレムLv.2が一体ずつ、ネクススは”崩壊する戦線”が二枚のみ、そして第7ターンを迎え、青年のターン。

『マジック発動”マジックドリル”と”マジックハンマー”を使用』

『またデッキ破壊か!』

マジックドリルの効果は相手の手札と同じ枚数デッキを破壊。そしてマジックドリルは相手デッキを5枚破壊。今、相手の手札枚数は5枚、つまりマジックハンマーの効果と合わせて、10枚デッキを破壊される。

『じゃあそろそろ終いだ、オリハルコンゴレムをレベル2で召喚』

『!?!』

どこからか青い宝石のような物が出現し、それが砕けたかと思うと地面が大きく盛り上がり、そこからオリハルコンゴレムが現れる。

”グオオオオオオオ——ッ！”

『さらにグランガッチと合体（ブレイヴ）させる』

ワニの姿をしたグランガッチがオリハルコンゴレムと一体となり、BPが11000となる。

『行け、合体（ブレイヴ）スピリット』

プレイヤーがアタックを命令したと同時に、スピリットの目が青く光り、次の瞬間、機人フィアルはグランガッチの合体時能力で破壊される。

『ライフで受ける！だが、フラッシュタイミング、デストラクションバリアを使用！これにより転生を持たない合体（ブレイヴ）スピリットを破壊』

オリハルコンゴレムはそのまま突っ込み、飛び上がると同時に大きな爪を振り下ろす。プレイヤーの周りにバリアのような物が展開されるが、オリハルコンゴレムの攻撃の前に簡単に破壊されてしまう。

だが、オリハルコンゴレムが相手のライフを削り、地面に着地したと同時にデストラクションバリアの効果によって破壊される。

『どうだ！』

『？……だからどうした？狙いはライフじゃなくてデッキだけど？』

『なっ！？』

そう言われると同時に自分のデッキを確認するが既にデッキ枚数はゼロ。そしてその後、ターンエンドを宣言し、相手のターンになるが、ドローできなくなった事で負けが確定し、そのまま決着してしまう。

『お、俺の負けだ』

そして次に画面が変わり、アナウンサーの女性が現れる。

『さあ今のが、チャンピオンシップ一回戦の試合です！これが決勝戦と言っても過言ではない試合を展開してくれた青デッキ使いの川村劉選手の対戦動画でした！そして早速彼にインタビューでも――』

続きを言おうとした瞬間、”ブチッ”とテレビの切れる音がする。

「やっぱすごいぜ！バトスピ！」

さっきまでテレビを見ていたその少年はソファを立ち上がり、さっきの映像の感想を言う。彼の名は若槻和人。15歳で彼もまたバトスピが大好きな少年なのだ。

「かつこいいいな、よし！もう我慢できねえ！早速バトスピセンターに直行だぁー！ッ」

すぐさま赤いデッキケースを持つと、玄関を飛び出しバトスピセンターというバトスピ専門の店へ足を急がせるのだった。

——バトスピセンター

バトスピ専門店。それがバトスピセンター。

この店では、たくさんさんのバトスピカードを取り扱ったり、店中に置かれた台座でバトスピをプレイしているたくさんの人達。

「うおおおおッ！」

和人は店のすぐ目の前まで駆け寄るとそのまますごい勢いで店へと入店する。

「いらっしゃ——って、和人君か」

「おーっす店長！」

「今日は遅かったね、知り合いの咲ちゃんは今とつくに來てるよ？」

「マジ！？」

和人とは顔馴染みの様子。この人物は村井知恵という名前でバトスピの知識に関しては群を抜くほどで、ここのバトスピセンターの店長をしているらしい。そして村井の言う咲とは、和人の幼馴染の女の子、木野咲のことだ。

「あつ、和人！どうしたの？遅かったじゃない」

「おお！実はバトスピニュース見ててすっかり遅れちゃって」

「はあ、和人らしい。まあ、さっさとバトルしない？」

「いいね！俺のデッキと早速バトルだ！」

そんな会話をしながら二人は台座にデッキを置き、バトスピの対戦を始める。

——10分後……。

「はい、ガブノハシでアタック」

「ら、ライフで受ける」

最後のライフが削られ、和人の敗北が確定。

「はあ、まだバトスピ経験浅い私に負けるんなんて」

「しょ、しょうがないだろ！今のは手札回りが悪かったんだ！フレームサイクロンとかバスタージャベリンが来てれば！」

「前はそれを加えた手札で、レイニードルやディノニクソーが来ればとか言ってた？」

「うっ！」

ちなみに言っとこれまでの二人の対戦成績は10戦中で木野が6勝4敗、和人が4勝6敗。

経験で言くと和人の方が上なのだが、実力はまだ初心者同然の木野より若干下。簡単にいえば、まだ彼は実力的に十分ではないという事だ。

「まあ、もしかして私がバトスピ経験があるのかな？」

「くそぉー！」

もう一回と頼みこもうとする和人。だが、彼がそのお願いをする前に突如周りの人達から「おおー」という声が聞こえてくる。

「！、やだ、今の勝利はまぐれなんですってば」

「おい木野、言っとくけどお前じゃないらしいぜ？」

「えっ？」

ふと後ろを見ると、そこでは髪型がアフロでサングラスをかけた一人の男性が既に何人共バトルし連勝しているからだ。

『すげえよ、もうこの人10連勝中だ』

『戦ってみたいけど、俺じゃあ手も足も出ないんだろっな』

観戦している何名かの声が聞こえてくる。

それを聞いていた和人はデッキを持ち、その人の所に歩み寄る。

「さあ、次の対戦相手は誰かな？誰でも受けて立つよ？」

「はい！はい！！はい次、俺やります！」

「おお、いいよ！君の名前は？」

「若槻和人！おじさんは？」

「俺の名は、人呼んでアフローヌ！さすらいのカードバトラーさ！」

自信満々な様子で決めポーズを決め、名を名乗るアフローヌと言う人物。

「アフローヌ？ま、まあともかく！早速バトルお願い！」

「おっと、ちょっと待って。君さっきそちらの女の子とバトルしてたよね？」

「ええ？まあそうですけど」

アフローヌと言う人物は木野を示しながらいい、その言葉に和人は頷く。

「その対戦を見てふと思ったんだが、少し君のデッキを見せてくれないかな？」

「ああ、はい」

言われるままに和人はデッキをアフロウヌに渡し、デッキを見てもらう。

「ふうん、ロケラトプスやディノニクソアの軽量スピリットにフレ임サイクロンやトライデントフレアの除去系マジックがあるのか」

「ど、どうですかね？」

「確かに君のデッキはイイ感じだけど、もうひと押し足りないね」

「どういう事ですか？」

「赤は本来攻めることが最大の基本だ。だけど、君のさっきの戦い方を見て思ったが、君はどちらかというと守りの向けの戦い方をしていたね」

「ええ、中々BPの強いスピリットがなくて」

「ふうん、どうやら君のデッキには運命の一枚がないらしいね」

「？」

「ただカードの効果がいいとか、見た目がいいという理由じゃなくて、自分が心の底から何かを感じたカード、それが運命の一枚だ！」

「運命の、一枚」

「よかつたらカードを購入してみたらどうだい？少しの間待ってあげるよ」

「はい！」

すぐさま駆け出し、商品の棚にあるブースターパックを見る。

『どうだい？どれを買うか決まったかい？』

「少し待っててくださいーい！」

大きな声で返事をするも、全部で14弾もあるブースターパックのどれを買うか中々決められずに迷っている状態だった。

「あれ和人君？カードを買うのかい？」

「あつ！店長。まあね」

「へえ、でもどれを買うか悩んでるようだね。まっ、じっくり選んでよ」

「はい！つて、店長それは？」

和人はふと知恵の持っている一つの箱が気になる様子。

「ああ、第7弾のパックが切れたからね、在庫から持ってきたのさ」

「へえ、確か第7弾つて、どんなカードがあるんでしたっけ？」

「ええ」と、確かメテオヴルムやビャクガロウとか、アレクサンダーとかかな？」

「うーん……」

「あれ？もしかしてこれが気になったの？」

「ま、まあそんなところです」

「へえ、じゃあ少しお安くしてあげようかな？」

「いいんですか！」

「どうする？これにする？」

「はい！」

お金を渡し、知恵から第7弾のブースターパックを受け取る。

「よし！じゃあバトルしに行ってきます！」

・
・

「中身確認しないの！？それに後少し待てば例のあれがもうすぐ――」

続きを聞く事なく和人はアフローヌが待っている場へと急ぐのだった。

「おじさん！カード買ってきましたよ！」

「随分早いね。早速開封したらどうだい？」

ゼエ、ゼエと荒々しい息を一通り整えると、和人は直ぐにそのパックを開封する。

「そのパックは第7弾か。いいカードが当たるといいね」

「はい！」

開封後、中身のカードを取り出し一枚一枚をじっくり見つめる。
そしてその中の一枚に和人はふと氣に取られる。

「このカード……！」

「どうだい？いいカード手に入った？」

「はい！何だかさっきおじさんが言ってたみたいにビビッと感じました！」

ブースターパックの中にあつたうちの一枚、「剣皇龍エクスキャリバス」というカードを取り出しながら言う。

「へえ、中々いいカードじゃないか」

「はい！俺、早速こいつをデッキに入れてぜひ勝負お願いします！」

「いいよ！じゃあ早速始め——」

『おゝい！和人君！！』

バトルを始めようとした矢先、それを止めるかのように知恵が現れる。

「店長！どうしたの？」

「ハア……ハア……どうしたのって、今日はあれが届くって前から言ってたでしょ？バトルするならそこでどうかなって」

「？」

「ああー！確かこの店でもついにあれが届く日だったね」

アフロー又は何かを思い出したかのように言う。

「あれ？」

「和人、陽昇マヒルって人知ってる？」

「ううん」

首を横に振りながら和人は答え、それに木野はあきれた様子だった。

「あのね、陽昇マヒルはリアルバトルフィールド、つまり人類最大の発明をした人でしょ？」

「ああそう言えば！確かこの店でも！」

「そう、そのバトルフィールドがこの店でも設置されるのよ」

「そうだった、そうだった！リアルバトルフィールド、俺ぜひそこでバトルしたいと思ってたんだ」

「そうか」

その言葉を聞いたアフローヌは笑みを浮かべながら口を開く。

「だったら、今から僕とやる試合はそこでしないかい？」

「えっ！」

「君も運命のスピリットを手に入れたようだし、大迫力のフィールドでスピリットと会いたいだろ？」

「はい！ぜひお願いします！！」

「そう言う事なら、ぜひこの店のフィールドで戦う第一号として頑張ってね二人とも！」

「「勿論！」」

それだけ言うと、二人はステージの前まで行き、他の観戦者達はステージの横にあるモニターを必死に眺める。

「じゃあ、二人とも、あのセリフは言えるよね？」

「勿論！行くよおじさん！」

「ああ、それじゃあ始めるか！」

「ゲートオープン！開放！！」

二人がその言葉を放つと、光に包まれ二人はその場から消え、リアルバトルフィールドへと移動するのだった。

第1話『出会いの始まり』（後書き）

いかがでした？ 第一話！

和人「何か色々駄作だけだな」

木野「まっ、次からは頑張つてよ」

頑張るからさ、批判はやめようね。

次回は主人公の第一バトル！ぜひご期待ください！

ちなみに今回はアニメでも登場したアフローヌが登場！今後もアニメキャラが登場するかもしれませんがぜひよろしくお願いします。

第2話『剣龍皇エクスキャリバス爆進!』（前書き）

はい、お待たせしました！バトルスピリッツ 激震の勇者、第2話の公開です！相変わらず文章力がなく、面白いかどうかは不明ですが、一目見ていただくと嬉しい限りです。

第2話『剣龍皇エクスキャリバス爆進!』

「おお！これがバトルフィールドか〜！」

大迫力のステージに立ち、興奮気味の和人。

「感動してるとこ悪いけど、早速始めないか？」

「あつ！はい！行きますよ、おじさん！」

先行は和人からで、試合は始まる。

「スタートステップ！」

和人の言葉に反応するかのように台座が光り、その後ドローステップを行い一枚ドローステップ。

和人の手札4枚↓5枚。

「行くよ！メインステップ！ディノニクソーをLv・2で召喚！」

コスト1のディノニクソーに3コアを乗せて台座に置くと、ルビーの宝石がどこからか現れ、それが砕けると小さな恐竜、ディノニクソーが現れる。

「ウォーッ！すっげー！！すっげー！！ディノニクソーがこんな目の前に！」

「そうか、君は確かスピリットを間近で見るのは初めてだよね？初のスピリット召喚の感動は確かに分かるよ」

「はい！こんなにリアルなディノニクソーを見て感激です！」

「はは、その気持ち確かに分かるよ。さあまだ君のターンだ。続けてくれ」

「ええ」と、俺はこれでターンエンドです」

第2ターン。

アフローヌはスタートステップを行った後、コアステップとドローステップを行う。

アフローヌ手札4枚↓5枚 コア4個↓5個。

「メインステップ！さあ今度は俺の番だ。リユザードを二体召喚！内一体はLv・2だ」

さつきデイノニクソーが現れた時と同じ要領で、ルビーの宝石が二つ出現し、それが砕けると二体のリュザードが出現する。

「行くぜ、アタックステップ！Lv.2のリュザードでアタック！ここでリュザードのアタック時効果発動！」

・リュザードLv.2のアタック時効果。
自分の赤のスピリット一体につき、BP+1000。

「俺の場合には二体の赤スピリット、よってBP+2000で4000だ」

リュザードの周りに赤い波動が集まり、リュザードのパワーが高まり、そのまま和人へと突っ込んでいく。

「（BP4000じゃ、デイノニクソーでブロックしても相討ち。無闇にデイノニクソーを破壊される訳にはいかない。ここは……）」

「さあ、この攻撃はどうする？」

「ライフで受けます！」

和人の周りにバリアが展開され、そのバリアにリュザードが真正面から突進し、そのバリアを砕く。

”パリーンッ！”

「痛あッ！！」

和人残りライフ5↓4。

ライフで受けるとそれなりの衝撃がプレイヤーを襲い、後ろに後退させられる。

「大丈夫かい？」

「つつ……まだまだ！この痛みが次のチャンスにつながるんですから！」

和人の言葉と共に、リザーブにさっきライフで受けたコア一つが置かれる。

「OK、中々いい気合だ！まだまだ勝負はこれからだね！」

「はい！」

「じゃあ、俺はこれでターンエンド」

第3ターン。

和人はスタート、コア、ドローステップを行う。
手札4枚↓5枚　コア5個↓6個。

「メインステップ！ディノニクソーをレベルダウン！」

ディノニクソーからコアを二個リザーブに戻し、それによりディノニクソーはLv・1となりBPは1000と、パワーダウンする。

「さあ一気にいきますよ！レイニードル！アンキラーザウルスを召喚！」

レイニードルとアンキラーザウルスどちらにもコアを二個ずつ置いた後、二つのルビーが出現し、それが砕けると、レイニードルは突如現れた雷雲から、アンキラーザウルスは地面を突き破るようになて現れる。

”ガアアアアアアアア——ッ！”

レイニードルとアンキラーザウルスの二体の咆哮がフィールド中に広がる。

「ううっ！レイニードル、アンキラーザウルス！やっぱかったいい！」

新たな二体のスピリットを見て、さらにテンションが上がる和人。

「低コストスピリットを並べて場を固くする。中々いい戦い方だよ」

「はい！それじゃ行きますよ！アタックステップ！さっきのお返しにレイニードルとアンキラーザウルスでアタック！」

アタック宣言と共にアンキラーザウルスとレイニードル、二体の龍がアフローヌに突っ込んでいく。

「ふっ、どちらもライフで受けるよ」

アンキラーザウルスは尻尾のドリルを回転させて起こったトルネードを、レイニードルは口を大きく開いて光線をそれぞれアフローヌに放ち、周りに展開されたバリアを簡単に砕く。

”パリーンッ！”

「ッ！中々効くね」

痛みを喰らいつつも、笑みを浮かべるアフローヌ。

二体のアタックをライフで受けた事によってライフは3に減ったが、コアは7個に増える。

「俺はこれでターンエンドです」

第4ターン。

スタート、コア、ドローを行い手札は4枚、コアは8個に増え、その後リフレッシュステップを行い、疲労しているリユザードが回復する。

「さて、メインステップ。こっから俺のターンと行かしてもらっよ」

「はい！」

「カグツチドラグーンをLv・2で召喚！」

炎に包まれた竜、カグツチドラグーンが姿を現し、力強い咆哮を上

げる。

「さあ行くよ！」

「！」

「アタックステップ、カグツチドラグーンでアタック！」

アタック宣言をすると、カグツチドラグーンは翼を羽ばたかせ、和人へと迫っていく。

「（次のターンを考えると、ライフで受けた方がいいな）ここはライフで——」

「いや、君は必ずブロックしないといけない」

「えっ？」

「カグツチドラグーンは【激突】の効果を持ってるからね」

「しまッ！」

・【激突】効果説明

このスピリットのアタック時、相手は可能ならば必ずブロックしなければならぬ。

「さらにカグヅチドラグーンのアタック時効果で俺は1ドロー」

「くっ、アタックはディノニクソーで受けます」

”ギャオオオオオオオオオ——ッ！”

カグヅチドラグーンは咆哮を上げながら、ディノニクソーに向かって火炎放射を放ち、ディノニクソーも自分の火炎放射で迎え撃つが、BPは圧倒的な差で、すぐにカグヅチドラグーンの火炎放射に押されて、火炎放射を浴び、ディノニクソーは倒れてしまう。

「！」

「さらにリユザードLv.2でアタック！」

「ライフで受けます！」

「ふっ、フラッシュタイミング！マジック、フレイムダンスを使用！」

相手がライフで受けるのを宣言したと同時にフラッシュタイミングでカードを使用。

「マジックカード!？」

・フレイムダンス効果説明

相手のBP4000以下のスピリットを一体破壊。

「不足分のコストはカグツチドラグーンをLv・1にして確保。そしてマジックの効果でアンキラーザウルスを指定する」

「そんな!？」

アンキラーザウルスの足元に炎が現れ、その炎でアンキラーザウルスを破壊されてしまう。

「そしてリュザードのメインアタック！」

リュザードが突っ込み、ライフを砕けれ、後ろに弾かれる。
和人残りライフ4↓3。

「うぐっ！」

痛みが和人を襲うも、コアは7個に増える。

「うつ……」

「俺はこれでターンエンド」

——第5ターン。

「強い！だけど、このほうが俺はテンション上げ上げだあ！」

「へえ、君みたいな子、どこかで見た気がするよ」

「ん？」

「嫌、何でもない。続けてくれ」

「はい！」

スタート、コア、ドローステップ後、手札は4枚、コアは8個。
そしてリフレッシュステップ後、レイニードルは回復。

「行きますよ、オヴィラプトとサーベカウラスLv・2を召喚！」

再び二つのルビーが出現と同時に砕けると、オヴィラプトとサーベ

カウラスが現れる。

「さらにマジック！エクストラドローを使用！」

「手札増強系マジックか」

・エクストラドロー効果説明
デッキから二枚引いた後、三枚目をオープンして赤のスピリットカードなら手札に加える。

二枚引いた後、一瞬和人の眼が変わり、それをアフローヌは見逃さなかった。

「（あの内の二枚カード、一体？）」

そしてその後三枚目をオープン、しかし来たカードはマジックカードのドラゴンズラッシュのため、手札に加えられない。

「これでターンエンド」

「あれ？何もしないのかい？」

「今は守りを固めるのが優先ですから」

「さっきの戦いと一緒じゃないのかい？」

「鎌掛けようとしても無駄ですよ。状況判断して俺が選んだ結果です」

「なるほど、いい目だ。じゃあ君が選んだ結果がどうなるのか俺のターンで分かる」

第8ターン。

アフローヌはメインステップまでの準備を進め、手札は4枚、コアは9個に増える。

「（さてここからだが、相手のスピリットはレイニードールLv.2、オヴィラプト、サーベカウラスLv.2が一体ずつ。だが注目すべきところはあの子の手札にある）」

アフローヌは和人の手札を覗む。

「（さっきのエクストラードローで引いた二枚のカード、その内一枚はキーカードとなりうる高コストスピリットと見た。だから次に引くカードであるドラゴンズラッシュと組み合わせてのコンボを狙う。ならばその前にこのターンで決着をつけなければ）」

自分の手札を見て、アフロー又は笑みを浮かべる。

「メインステップ！カグヅチドラグーンをLv・2にして、リユザードをレベルダウン。さらにオードランを召喚」

二体の龍のレベル変化後、コスト0のオードランが小さな翼をはばたかせながら地面に降り立つ。

「さあ行くよ！こっからが本番、覇龍ヴァダンライザーを召喚！」

「!？」

大きめのルビーが出現し、それが砕けると地面を突き破るように覇龍ヴァダンライザーが現れる。

「不足コストはオードランから確保」

オードランから一個は取り除かれ、そのコアは直接ヴァダンライザーへと移され、オードランが消滅するも、代わりにヴァダンライザーが出現する。

「さあ、覇龍ヴァダンライザーの召喚時効果発動！」

・覇龍ヴィダンライザーLv.1、2、召喚時効果。
このスピリットの召喚時、相手のBP3000以下のスピリットを
全て破壊する。

「つ、つまり！」

「そう、君のオヴィラプトとレイニードルは破壊だ」

”グオオオオオオオオオ——ッ！”

覇龍ヴァダンライザーは炎を纏わせた腕を地面に叩きつけ、レイニードルとオヴィラプトの足元に火柱が立ち、それにより二体は破壊されてしまう。

「！」

「これで君のブロッカーはサーベカウラスだけ。行くよ、アタック
ステップ！覇龍ヴィダンライザーとリュザードでアタック！」

「！、ライフで受けます」

リュザードの突進とヴァダンライザーの拳が決まり、残りライフは
1つとなり、コアは10個。

「まだまだ行くよ！カグツチドラグーンでアタック！効果で一枚ドロ、さらに【激突】発動！」

「サーベカウラスでブロック」

サーベカウラスは受けて立つ素振りを見せ、こちらに向かって来るカグツチドラグーンを見る。

「フラッシュタイミング！グレートリンクを使用！」

「！？」

・グレートリンク効果説明。

自分のフラッシュにあるコアすべてを、【覚醒】を持つ自分のスピリット一体の上に置く。

「コストはリザーブから確保し！このマジックで使用した2コアを、さらに第7ターンで使用した4コア、計6コアをサーベカウラスの上に置き、Lv.3にアップ！」

「！、これじゃあカグヅチドラグーンは返り討ちか」

カグヅチドラグーンの放った炎をサーベカウラスはジャンプで交わすと、カグヅチドラグーンに取り付き、爪をカグヅチドラグーンに突きたて、爆発が起こり、サーベカウラスはその爆風から飛び出して、和人のフィールドに戻る。

「だが、まだ俺のアタックは終了してない。リュザード！行け！」

「こつちもまだだ！フラッシュタイミング！フレイムサイクロンを使用！コストはサーベカウラスから使用！」

・フレイムサイクロン効果説明
BP5000以下の相手スピリットを一体破壊する。

「これによりリュザードを破壊！」

「！、まさかこの攻撃にカウンターをぶつけてくるなんてね」

「へっへ！どんなもんですか」

炎の竜巻にリユザードは吞まれ、破壊される。
これ以上は何もできないため、アフロローヌはターンエンド。

——第9ターン。

「行くぜ！」

メインステップまでの準備を進め、手札は二枚、コアは11個。

「サーベカウラスをLv・1にダウン！」

「相手の手札は二枚、それでどうする気だい？」

「まだまだ！マジック、エクストラドローを使用！」

「！、手札増強系マジック、まだ仕込んでいたとは」

「二枚引いて、三枚目をオープン！そのカードは……」

そのカードを見て、和人は笑みを浮かべる。

「三枚目は剣龍王エクスカリバス！」

「！？、ここであたか……君にとって運命の一枚」

「このターンで決めて見せます！レイニードル、ロクケラトプスを召喚！そして、サーベカウラスを【転召】！」

・【転召】効果説明。

条件を満たしたスピリットのコアを指定場所に置いて、召喚できるスピリットの事。

サーベカウラスが赤い炎に包まれ、その炎の中に一つの影が……。

「炎纏いし龍の皇！剣龍皇エクスカリバスを召喚！」

その影は炎を振り払い、火の粉でその身を輝かしながら力強い咆哮を上げる。

「うおおー！ツ！出たぜ！出たぜ！俺の運命のカード！エク
スキャリバス！」

”グオオオオオオオオ——ッ！”

「なるほど、確かにかつこいいドラゴンだな」

「さあ、まずはこいつの召喚時効果！」

・剣皇龍エクスキャリバスLv.1、2召喚時効果。
このスピリットの召喚時、BP合計6000分になるよう相手スピ
リットを好きなだけ破壊する。

「これにより、おじさんの場に居るヴァダンライザーBP4000
とリュザードBP1000の二体を破壊！」

”グオオオオオオオオ——ッ！”

翼を羽ばたかせ空へと舞い、そのまま回転して自身の体に炎を纏わ
せてリュザードとヴァダンライザーに突っ込み、破壊する。

「！」

「そしてアタックステップ！剣皇龍エクスキヤリバスでアタック！
ヴィダンライザーとリユザードを破壊し、相手の場を一掃しただけ
でなく、このターンでエクスキヤリバス、レイニードル、ロクケラ
トプスでアタックすれば和人の勝利が確定する。もう目の前にある
勝利を確信し、和人は笑みを浮かべる。

だが、アフロノの実力はまだそんなに甘いものではなかった。

「フラッシュタイミング！」

「！？」

「マジック、ヴィクトリーファイアーを使用！」

「そ、そのマジックって！？」

・ヴィクトリーファイアー効果説明。

B P 3 0 0 0 以下の相手スピリット、二体を破壊。

「これにより君のレイニードル、ロクケラトプスを破壊する！」
フィールドに突如Vの形をした炎が現れると、その炎はエクスキヤ
リバスのすぐ隣を突き抜け、後方に居るロクケラトプスとレイニ

ドルを破壊する。

「嘘!？」

「エクスキャリバスはライフで受ける」

エクスキャリバスの炎を喰らい、残りライフは二つ。

「お、俺はこれでターンエンド」

第8ターンのカウンターをまさかのカウンターで返されてしまった和人。

これによりただ勝利を逃してしまっただけでなく、ブロッカーさえも残せなくなってしまったのである。

「じゃあ俺のターン」

コアステップ、ドローステップを行った後、自分の手札を見る。

「どうする？まだ続ける？」

「当たり前じゃないですか！フィールドに立ったら最後まで戦います！」

「よく行つた。それじゃあ続けようか」

手札の内、一枚に手を掛ける。

「君の相棒を見せてもらった礼に、俺も相棒を見せてあげよう」

「！」

「燃え上がれ赤き龍！熱く！激しく！魂の雄たけびを今ここに！！
霸王（ヒーロー）×レア、龍の霸王ジーク・ヤマト・フリードを召喚！」

突如雷雲が現れ、その雷雲に穴が開いたかと思うとそこから一体の龍が舞い降り、赤き炎に包まれた剣を握りしめ、後ろの雷鳴をバツクに唸りを上げる。

”グオオオオオオオオオオ——ッ！”

「こ、これが……龍の、霸王」

「終わりにしよう、アタックステップ、ジークヤマトフリード！決着をつけるぞ！」

「!……ラ、ライフで受けます!」

最後のライフをヤマトは赤き剣を振り下ろして砕き、ライフが0になったため、勝負がつく。

「いい勝負だったよ、運命の一枚に出会って君のデッキも進化したようだね」

「はい！ありがとうございます！」

試合を終え、バトルフィールドから出てくる二人。

そしてそんな二人の試合を見て観戦者達は、祝福の声を二人に送る。

「でも惜しい事を言うと、君はドラゴンズラッシュを使えずにいたね」

「え、ええ」

「まだまだ君のデッキも君自身も成長する。もっともっと頑張るんだよ」

「はい！」

「よし！じゃあ君の成長を記念して、これを送ろう」

「？」

アフローヌから一枚のカードを渡され、それを見ると、それはさっきの試合で使っていたヴィダンライザーだった。

「！？、いいんですか？Mレアなのに！？」

「いいんだよ。僕より君の方がそいつを存分に力を引き出せるし、

なにより君のキースピリット、エクスカリバスと相性がいいはずだ。ぜひこれから頑張つてよ！」

「はい！ありがとうございます！」

「よし、それじゃそろそろおじさんも行かないとな。今日は君みたいな強い子にもたくさん会えたし、またちよくちよくここに遊びに来るからその時はよろしくね」

「「「はい！」」」

その場に居た全員アフローヌに返事をする、アフローヌは笑顔でその場を後にした。

「よかったね。和人！強力なスピリットが手に入って」

「ああ！ヴィダンライザーが手に入ったのも嬉しいけど、何より俺の運命のカード！エクスカリバスと出会えたのが何より嬉しいぜ！」

「じゃあもつともつと強くないとね！」

「ああ、今日は負けたけど、今後はもつとこいつの力を引き出して

絶対勝つぞーッ！」

次こそ絶対に勝つという意思表示をしながら、その店を後にする和人と木野であった。

第2話『剣龍皇エクスカリバス爆進!』（後書き）

どうでしたか？第二話！

和人「俺の運命の一枚、エクスカリバス初登場の回だ!」

木野「運命の一枚、私も手に入りたいな」

和人「やっぱりバトスピは最高!まだ始めてない人もぜひ始めて欲しいぜ!」

木野「ルールについては『バトスピルール』と検索!」

和人「説明については他人任せ何だな」

木野「そんな事とはかく!次回もよろしくね!」

和人「お、俺からもよろしく!」

第3話『新しい出会い』（前書き）

始めました第三話！

今回もぜひ頑張って書いていくのでよろしくお願いします。

第3話『新しい出会い』

「じゃあ俺のターン！ブライトライデントを転召！」

バトルフィールドではなく、普通の台座でバトルしている和人と咲。そしてそのバトルの様子を映し出しているモニターの画面では、コスト3のブライトライデントが消滅し、エクスキャリバスが現れる。

”グオオオオオオオオオ——ッ！”

「召喚時の効果！BP合計6000分になるよう好きなだけ破壊」

「！？、ってことは」

「ガブノハシBP1000、ビートビートルBP1000、グラン
トベンケイBP4000、つまりお前の場のスピリット全てを破壊
！」

三対のスピリットが炎に包まれ、消滅してしまう。

「！」

「エクスキャリバスでアタック！」

「ら、ライフで受ける」

残り一個のライフをリザーブに下げ、ライフが0となる。

「よっしゃあゝッ！俺の勝ちだ！！！」

「はあゝ、負けちゃった。そのカード、エクスキャリバスを手に入れたから随分強くなったよね」

「まあな！あのおじさんに言われた通り、このカードに出会ってから一気に全てが変わったんだよね」

「まあ最近の戦い方を見る限り、守り重視から攻め重視の戦略に変わったよね」

「ああ、こいつと一緒にもっともっと強くなっていく！」

そんな事を言いながら、台座から立ち上がり何かを決心したように他の人たちを見る。

「誰か、俺と一勝負しない？」

『じゃあ俺とやろうぜ！』

『いや、俺とやろう！』

さっきのバトルを見て、戦ってみたいと思ったのか数名のカードバトルー達は和人に勝負を挑む。

「よーし！かかってこい！」

デッキを持ち、対戦者とバトルを開始する。

「すっかり上達したようだね。和人君」

バトスピショップの店長である村井知恵。彼女は和人達の様子を見て微笑ましい物を感じていた。

”ウィーンッ”

「あっ、いらっしやい」

自動ドアの開く音がし、そこにはデッキケースを腰につけ、歳は和人達と変わらない少年が居た。

「すみません。第11弾のカードをくれますか？」

「はい。第11弾ね」

パッケージに太陽神龍が派手に飾られている第11弾のパックを渡すと、少年はそのパックを開き、中のカードを取り出す。

そしてカードを確認していき、その内の一枚がXレアである宝瓶神機（ほうべいしんき）アクア・エリシオンのカードだった。

「おめでとう！Xレア。当たってよかったね」

「ありがとうございます。このカード特に手に入れたかったカードなんです」

「そうなんだ」

「ええ、あいつとの再戦のために」

「？」

そんな中、カードバトラー達が何かでにぎやかになっている事に気づく。

「何かあるんですか？」

「まああるカードバトラーが大活躍ってところかな」

「面白そうですね」

そう言う少年はその場に近づいていく。

「暴双龍ディラノスLv・2でアタック！」

「キジトリアLv・2でブロック！」

互いのBPは5000。本来なら、二体とも相打ちだが、ここでディラノスの効果が発動する。

・暴双龍ディラノスLv・1、2、3の効果。

【覚醒】を持つ自分のスピリット全てにBP+1000。

・暴双龍ディラノスLv・2、3『お互いのアタックステップ時』

地龍を持つ自分のスピリット全てに【覚醒】を与える。

「よってバトルはディラノスの勝ち!」

「ぐっ!」

ディラノスの口から放たれる炎によってキジトリアは消滅。

「ロケケラトプスでアタック!これで決まりだ!」

相手のライフが0となり、和人の勝利となる。

『すげー、さすがは運命の一枚を持ったバトラーだぜ』
『もう5連勝以上してんじゃない?』

観戦者達の声、それを聞くと少年はぜひ自分も戦ってみたいと思っ

「さあ次は誰だ?」

「じゃあ、次俺とやらないか?」

「おっし!じゃあ早速やろう!」

振り返りお互い、顔を確認すると、何かに気付いたようで……。

「「あー……ッ！」」

互い互いを指さしながら、お互い驚いた表情を見せる。

「？」

何の事なのか全く分からない様子の観戦者達。
そこへ観戦者達を押しつけ、咲が来る。

「和人何騒いでんの？って……リクト君！？」

咲がリクトという少年。彼の名は来道リクトと言い、咲や和人達とは昔の幼馴染なのだ。

「随分懐かしい、ほんと久々だな」

「俺も、久々に会えてうれしいぜ」

「それよりしばらく見ない間に随分強くなったようだな」

「ああ！俺は運命の一枚って奴に出会ってな！」

「運命の一枚？」

「ああ、俺の運命の一枚！剣龍皇エクスカリバスだ！」

きらきらと輝くエクスカリバスを持ち、リクトに見せる。

「運命の一枚か、それって自分が何かを感じた一枚って事か？」

「ああ！その通り！！」

「それなら、俺にも運命の一枚と呼べるカードはある」

「！？」

「まっ、その一枚はバトルで見せる。それより、バトル始めないか？」

「ああ！」

「どうせなら、バトルフィールドでしないか？」

リクトの提案に和人は力強く頷き、二人はフィールドに立つ。

「ゲートオープン！開放！！」

二人は光に包まれ、リアルバトルフィールドへと移動する。

第3話『新しい出会い』（後書き）

いかがでしたか？

今回は咲と和人の幼馴染である来道リクトが登場！

さらに次回、いよいよリクトの実力を公開していききたいと思います！

リクト「問題はそれを早く書けるかだけだね」

和人「まあ更新ペース遅いから」

ちゃんと急いで書きます！

という訳で次回も宜しくお願いします

第4話『剣龍皇VS月光龍 炎と月のバトル!』（前書き）

はい!今日は出かける前に時間があつたので、書きあげている第4話を投稿したいと思います。

そして前回登場したリクトの实力はどれほどのものなのか!ぜひ一度ご覧ください!

第4話『剣龍皇VS月光龍 炎と月のバトル!』

光に包まれ、バトルフィールドに現れるリクトと和人。

「やっぱバトルフィールドだと、ものすごくテンションが高くなる」

「まっ、俺もお前もスピリットを間近で見たいと小さい時から思ってたっけな」

「ああ、その思いが実現できて!ホント幸せだ」

「ふ、余韻に浸るのはいいけど、さっさと始めようか?」

「そうだよな。じゃあ俺からの先行で!」

「構わない」

—— 第1ターン。

「それじゃあ、スタートステップ!」

和人からの先行で始まり、バトルが開始される。

「ドローステップ！、そしてメインステップ！」

手札のカードの内一枚に手を掛ける。

「ネクサス！」千識の溪谷”を配置！」

「ネクサスカード？随分珍しい」

「へへ！俺だってネクサスを配置するさ」

和人の後ろに”千識の溪谷”がまるで城のように現れる。

「へえ、ネクサスってこんな出方するんだ」

「おいおい、んな事は後だろ？」

「おっと、そうだった。俺はこれでターンエンド」

第2ターン。

「俺のターン、スタートステップ、コアステップ、ドローステップ」
コア、手札共に5つに増え、そしてリクトはそのままメインステップに入る。

「ノーザンベアードを召喚、Lv・2」

白いダイヤモンドが砕け、ノーザンベアードが現れる。

「俺はこれでターンエンド」

「あれ、何もしないの？」

「？、ノーザンベアードは守りに適したスピリット。ブロッカーとして残すのが普通だろ？」

「あつ、そーいやそーうだな」

「お前、まさか守り重視じゃなくなったからって、極端に攻めてばかりいるんじゃないだろうな？」

「……まあね」

軽く頬を掻きながら、リクトに伝え、少しあきれた様子だった。

「状況によつては、例え攻めに適した赤でもブロッカーに残せよ?」

「と、とにかく!これでターンエンドだよな」

「ああ」

——第3ターン。

「行くぜ!スタートステップ!」

そしてその後コア、ドローステップを行う。

コア5個 手札5枚

「レイニードルを召喚!」

レイニードルにコアが一つ置かれ、Lv・1でフィールドに出現する。

「そしてネクサス、”決闘台地”を配置！」

「またネクサスか」

「そしてマジック！エクストラドローを使用！」

「！」

「このマジックはデッキから二枚ドローした後、三枚目をオープンしてそれが赤のスピリットなら手札に加える」

マジックの効果に従い、二枚をドローをした後、三枚目をドローする。

そしてその三枚目は”龍皇ジークフリード”なので、手札に加えられる。

「まだまだ行くぜ！バーストをセット！」

「！」

・バースト説明

裏向けのまま、専用場所にセットし、発動条件が満たされるまでそのままの状態のカード。

バーストがセットされ、リクトの目付きが変わる。

「俺はこれでターンエンド」

第4ターン。

（やっぱり和人、成長してるな。面白くなりそうだが、あまり長勝負をする訳にはいかない）

ある事がリクトの脳裏を横切りつつも、スタートステップを行い、メインステップまでの準備を終える。
コア、手札共に6つ。

「ノーザンベアードをレベルダウンさせて、レーヴァテインとミブロツクソルジャーを召喚！」

ノーザンベアードからコア一個を取り除き、レベルがダウンするも、レーヴァテインとミブロツクバラガンが新たに現れ、リクトのスピリットは計3体。

「ミブロックソルジャー召喚時効果發揮！」

・『ミブロックソルジャーLv.1、2召喚時効果』
相手スピリット一体を手札に戻す。

「つまりレイニードルを手札に戻す」

「！」

ミブロックソルジャーの刃から放たれた斬撃破がレイニードルに直撃し、レイニードルはその場から消え、手札となって和人の元へ戻る。しかし、それを見て和人には笑みが……。

「待つてたぜ！」

「何！？」

「バースト発動！マジック、双翼乱舞！！」

・双翼乱舞『効果説明』

バースト発動時、自分はデッキから二枚ドローする事が出来る。

「これで俺は二枚ドロー！」

「随分と手札を揃えていくんだな」

「まあ、手札あってこそその戦略だし」

「へえ、でもまだ俺のターン。続けるぞ、アタックステップ！」

「！」

「レーヴァテイン、ミブロックソルジャー、行け！」

「ラ、ライフで受ける！」

レーヴァテインとミブロックソルジャー、二体のスピリットが振り下ろす刃がプレイヤーに展開されたバリアを砕き、ライフで受ける痛みと共に残りライフが3まで削られる。

「ターンエンド」

第5ターン。

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！」
コア8個 手札8枚。

「手札もコアも揃ってきたし、どういう戦略で行く？」

「さあな、メインステップ！レイニードルを再び、そして龍皇ジークフリードを召喚！」

コアが置かれ、雷雲からレイニードルが、そして地面から噴き上げた火柱の中からジークフリードが出現する。

「4コア追加でジークをLv・3に！そのままアタックステップ！ジークフリードでアタック！」

「ノーザンベアードでブロック！ブロック時効果発動」

・ノザンベアードLv・1、2のブロック時効果。
ブロック時、ボイドからコアを一つ、このスピリットの上に置く。

その特殊効果により、BPは5000になるも、龍皇はその二倍のBPを誇り、勝負は目に見えている。

予想通りジークフリードは向かってきたノーザンベアードを軽々と

持ち上げると、そのまま投げ飛ばし、ノーザンベアードを倒す。

「俺のターンはエンド」

—— 第6ターン。

リクトのターン、スタートステップ後、その後リクトはコア、ドロ
ーステップを行う。

コア7個↓8個 手札4枚↓5枚

「ここまでではほぼ互角。でも俺の元にようやくお気に入りの一枚が
来た」

「！、キースピリット！？」

「ああ、覚悟はいいか？」

「来い！」

「メインステップ、これが俺のキーカード！月光龍ストライクジ
クヴルムを召喚！」

白い月がフィールドを照らし、ストライクジークヴルムが姿を現す。

”ギャオオオオオオオオ——ッ！”

「！、ストライクジークヴルム！かつこいい！！」

「ああ。こいつを手に入れて、いつか間近でこのスピリットを見てみたいと心の底から思ってたからな」

「それ分かる！俺も今場にいるジークフリードとか、エクスキャリバスを間近で見てみたいと思ったしな！」

「ふっ、やっぱり和人は和人だな」

「？」

「何でもない。続けるぞ、レーヴァテインとミブロックスルジャーから全てのコアを外す」

二体のスピリットはコアを外したため、消滅。

「そしてそのコアを使って、鳳凰龍フェニックスノンを直接合体（ブレイヴ）」

翼を羽ばたかせながらフェニックキャノンが出現し、それが砲台のような姿に変わると、ストライクジークヴルムと合体する。

「！、すげー！合体（ブレイヴ）スピリット！」

「いちいち興奮しすぎだろ？」

「はは、テンションが高くなって」

「続けるぞ、フェニックキャノン召喚時効果でレイニードールと千識の渓谷を破壊」

ストライクジークヴルムから火球弾が放たれ、ネクサスとレイニードールが破壊される。

「！」

「アタックステップ、行け！合体スピリット！！」

「ラ、ライフで受ける！」

合体スピリットは翼を羽ばたかせ、空中を舞うと、強烈な荷電粒子砲が放たれ、展開されたバリアを簡単に砕き、残りライフは2。

「ターンエンド」

—— 第7ターン。

和人はメインステップまでの準備を進め、ジークフリードは回復。
そして手札は7枚、コアは10個となる。

「ネクサス、焰竜の城塞都市を配置。そしてディノニクソーを召喚。
ターンエンド」

—— 第8ターン。

「守りを固めるなら、攻め破るまでだ。スタートステップ」
コア、ドロー、リフレッシュステップを行い、合体スピリットは回復。

そしてコアは9個、手札は4枚。

「メインステップ、レーヴァテインを召喚。そして、フェニックキヤノンを分離させて、セイバーシャークを召喚」

フェニックキヤノンがストライクと分離し、今度はセイバーシャークとレーヴァテインが出現する。

「そしてセイバーシャークと合体！」

「今度は白のブレイヴか！」

セイバーシャークの形状が変わり、ストライクと合体すると粒子でできた刃のような物が出現する。

「そしてフェニックキヤノンからコアを外して合体スピリットをLv.3にアップ」

フェニックキヤノンが消滅するが、合体スピリットはレベル3となり、力強い咆哮を上げる。

「アタックステップ！合体スピリットでアタック」

「龍王ジークフリードでブロック！」

翼を羽ばたかせ攻撃を仕掛ける合体スピリット。

ジークフリードはそれを迎え撃とつと、翼を羽ばたかせ、合体スピリットに向かっていく。

二度、三度とXレア同士はぶつかっていき、お互いに弾かれ、距離が離れた時、龍皇は強烈な火炎放射を放つが、合体スピリットは素早い動きで炎を避けながら、ジークに接近していき、粒子の刃でジークフリードを貫き、ジークは爆発四散する。

「勝負あり！」

「ぐっ！」

「そしてセイバーシャークの召喚時と合体時の能力を発動」

「！」

・セイバーシャーク召喚時効果。

自分のスピリット全ての『ブロック時効果』を『アタック時』に発揮させる。

・セイバーシャーク合体時効果。

ブロック時、相手のスピリットだけを破壊した時、相手のライフを

一つリザーブに置く。

「つまりブロック時効果をアタック時に発揮するため、相手ライフを一つ削る」

「ぐっ、でもこっちだって龍皇の効果がある！」

・龍皇ジークフリードLv.3破壊時効果。

このスピリットが破壊された時、ボイドからコアを一つライフに置く。

「だからライフは減らない」

「ふ、だがまだアタックステップは続いている。レーヴァテインでアタック」

「ライフで受ける！」

レーヴァテインの振り下ろした剣によってライフが減られ、残りライフは一つとある。

「ターンエンド。絶体絶命だな」

——第9ターン。

「ライフは一つ。確かに絶体絶命だけど、最後の最後まであきらめないぜ！」

「その意気だ」

スタートステップ後、コア、ドローを行う。
コア13個、手札6枚。

「行くぜメインステップ！キングゴラドンを召喚！」

赤いルビーが砕け、怪獣とも呼べるような姿をしたキングゴラドンが出現する。

「さあ、ここで行くぜ！炎を纏いし龍の皇！剣皇龍エクスキャリバスを召喚！」

キングゴラドンが炎に包まれ、その炎に影が浮かび上がったと思うと、炎を振り払い、火の粉で身を輝かせながらエクスキャリバスが地面に降り立つ。

「来たぜ来たぜ！エクスカリバス！今日も頑張っていこうぜ！」

和人の言葉に応えるかのように、エクスカリバスは咆哮を上げる。

「これがお前のキーカード！」

「へへっ、続けて行くぜ！エクスカリバス、召喚時の効果でレーヴァテインを破壊！」

エクスカリバスは出現と同時に火炎放射を放ち、それによりレーヴァテインは破壊される。

「さらにリザドエッジを召喚してドラゴンズラッシュを使用！これにより古竜を持つスピリットがバトル勝利時、回復する」

「来るか！」

「ああ、アタックストップ！」

「来てみる。だがここで合体スピリットの効果発動！」

・月光龍ストライクジークヴルムLv.3『合体時』相手のアタックストップ時効果。

ステップ開始時、相手スピリット一体を指定し、指定されたスピリ

ットはこのターン、必ずアタックしなければならない。

「指定するスピリットはエクスキャリバス」

「指定されようが関係ない！端からアタックするつもりだ！行け、エクスキャリバス！！」

「迎え撃て、合体スピリット！」

相手スピリットのアタックによってストライクは回復し、エクスキャリバスと激突する。
エクスキャリバスと合体スピリットの翼が何度もぶつかり、激しい火花を散らす。

「フラッシュタイミング！マジック、バスターランス使用！これによりエクスキャリバスのBPを3000プラスして、BP、11000」

「無駄だ。こっちのBPは13000だ！」

「まだまだ！フラッシュタイミング、双光気弾を使用！」

「何！？」

「こいつの効果は、相手ネクサス、または合体スピリットのブレイヴを破壊する効果。よって、セイバーシャークを破壊！」

「しまった！」

一気に粒子の刃で切り裂こうとするストライク、しかし双光気弾によつて、セイバーシャークが破壊され、BPは10000にダウンする。

「こ、こんな事が！」

「決める！エクスキャリバス！」

エクスキャリバスはその身に炎を纏わせ、そのまま炎を纏わせた突進をストライクに直撃させ、ストライクは破壊される。

「そ、そんな！」

「ドラゴンズラッシュの効果でエクスキャリバスは回復。そしてエクスキャリバス、ディノニクソー、リザドエッジでアタック！」

「フラッシュタイミング！ミストカーテンを二枚使用でディノニクソーとリザドエッジに対して使用！この効果によりディノニクソーとリザドエッジのアタックではライフが減らない！」

・ミストカーテン効果。
相手のスピリット1体を指定し、このターン、そのスピリットのアタックでは、自分のライフは減ない。

「だけど、エクスキャリバスのアタックは止められないぜ！」

「ぐっ……」

エクスキャリバスの炎によって、ライフが碎かれ、残りライフは4つ。

「手札とコア全て使用した強烈なアタック。随分手痛いぜ」

「へへっ、ターンエンド」

（さて、さっきのマジックで手札は使い切ったが、相手のスピリットは全て疲労、そしてライフは一つ。このターンのドローでスピリットカードが引ければ俺の勝ちだ）

スタートステップ、コアステップを行いそしてドローステップ。

「何が来る！」

山札から一枚ドロー、そしてそのドローしたカードを確認すると、それはガドファントだった。

「俺の勝ちだ。メインステップ！ガドファントをLv・2で召喚！」

白のダイヤモンドが砕け、ガドファントが出現する。

「アタックステップ！ガドファントでアタック！これで決まりだ！」

「いや、まだまだ！フラッシュタイミング、フレイムサイクロンを使う！」

「！？」

「フレイムサイクロンの効果は、BP5000以下の相手スピリッ

ト一体を破壊。よってガドファントを破壊だ！」

炎を竜巻によって、ガドファントは破壊されてしまう。

「何でだ？さっきターンで手札全て使用したんじゃない？」

「俺のネクサス、焰竜の城塞都市の効果は自分のアタックステップ時、相手スピリットを破壊すれば一枚ドロウ出来るんだ。だから前のターンのストライクの破壊で、一枚ドロウ出来たって訳」

「しまった！ネクサスを見落としていた」

「どうする？」

「ぐっ、ターンエンド」

——第11ターン。

「行くぜ！スタートステップ！」

和人はその後、コアステップを行いコアは14個に増える。

そして次のドローステップ。

「今度は俺が引く番か」

「そうだな」

「そっちは手札もスピリットも0、こっちはスピリット三体。スピリットを引ければ俺の勝ちだ」

「続ける！俺も最後まであきらめない」

「行くぜ！ドローステップ！」

山札から一枚引き、そのカードを確認する。

「さあ、何が来たんだ？」

リクトの方を向き、和人は笑顔をリクトに向ける。

「行くぜ！巨竜ギガノトンを召喚！」

「！」

「今度は俺が言う番だ。これで俺の勝ち！アタックステップ！ディノニクソー、リザドエッジ！行け！！」

リザドエッジは回転しながら背中^の刃を、ディノニクソーは火炎放射をリクトにぶつけ、ライフを砕く。

「ぐっ!!」

「これで決める！ギガノトン！エクスカリバス！その業火で幕を下ろせ！」

ギガノトンとエクスカリバス、二体の炎がリクトに決まる。

「ぐわぁッ!!」

ライフが0となり、勝負が決まる。

『うおおお、すげーバトル！』
『やっぱすごいな、二人とも』

観戦者達はフィールドから戻ってきたリクトと和人を尊敬するよう
に見る。

「やったね和人！見事に勝ったじゃない！」
咲は拍手をしながら和人に言う。

「ああ！」

「ふゝ、前あった時とは比べ物にならないほど強くなったな」

「へっ！カードバトラーは日々成長していくもんだぜ！」

「まあ、まだまだ俺のデッキ改善する余地ありか」

そう言いながら、その場を立ち去ろうとする。

「どこ行くんだ？」

「うん？実は明日とある奴とバトルするんだ。だからそのためのデッキ改造だ」

「誰と？」

「川村劉」

「「「！？」」」

その言葉を聞いて、その場にいた全員驚いた様子だった。

『川村劉って、チャンピオンシップに出てたやつだよな？』
『そんな奴とバトルするのかよ？』

『おい、それよりあのリクトって人、チャンピオンシップ一回戦で川村と戦ってなかったか？』

「えっ！」

ある一人の声から、全員「確かに」と言った様子でリクトを見る。

「まあそうなるな、けど俺はまだガンスリンガーをパス出来るハイランカーパスを持ってないし、実力としては全然だけどな」

「そう言う事じゃなくて、川村って奴とのバトルって事はリベンジ戦って事か？」

和人の質問にリクトは頷く。

「ちょっと待って！、和人ってリクトさんほどの人物に勝利できたの？」

「まあ、和人も相当な実力だし、今回は力及ばずってことだな」

リクトは笑いながら言う。

「んなことねえよ！俺は今回、運が良かっただけ。もしもう一回すれば俺が負けるかもしれない」

「おいおい、あまり謙遜するなよ。まあともかく今回はお前の勝ち、

ただそれだけだ。まあ長話してる場合じゃないし、そろそろ行こうかな」

「リクト！その川村って奴との試合！頑張れよ！！」
立ち去ろうとするリクトに言つとリクトは足を止める。

「まあ力を全部出し切るさ。試合場所はここ何だが、もしよかつたら見に来てくれよな」

「ああ、絶対行くぜ！」

リクトは笑みを浮かべると、その場から立ち去っていく。

「明日、川村って人とリクト君、どっちが勝つんだろっね？」

「さあな、どっちもチャンピオンシップに出場してるほどの実力だろ？すごい試合が期待出来るぜ！」

「じゃあ私はそろそろこの辺で」

「お、おおー！」

咲もバトスピショップを後にし、その場を立ち去っていく。

「リクトと川村って奴の勝負ぜひ見てみたい！それに川村って奴とぜひバトルしたいぜ！」

自分のデッキを見ながら、ただもつと強敵とバトルがしたいという願いを込めながら、ひたすらバトルに打ち解ける和人であった。

第4話『剣龍皇VS月光龍』

炎と月のバトル!』（後書き）

第4話いかがでしたでしょうか！

リクトのキーカード、「月光龍ストライクジークヴルム」今では少し古めのカードですが、その力は今も健在です。今ではすっかりバースト環境ですが、ブレイヴも決してそれに劣ってはいません。

そして次回、青デッキ使いの川村劉がついに登場！

次回、リクトとどのような試合を展開するのか、ぜひご覧ください。

第5話『川村vsリクト！ 青と白の大激突！』（前書き）

どうもブラストです！

やっと第5話を書き上げました！

ぜひその出来上がった作品を一目見ていただくと嬉しい限りです。
そして今回初登場の川村劉、彼の実力がこの話で明らかに！

川村とリクトの激しい試合をぜひご覧ください！

第5話『川村vsリクト！ 青と白の大激突！』

「じゃ！行つてきまーす！」

軽く手を振り、挨拶を済ませると家を飛び出しその場を駆け抜けていく和人。

彼が朝早くから駆けだすのは勿論理由がある。

昨日リクトが言っていた川村との試合があるからだ。

リクトも川村もチャンピオンシップに出場してるほどの実力。

そんな実力を持つ二人のバトル、和人としては何が何でも見逃す訳にはいかなかった。

「和人ーッ！」

「？」

突然の声に振り替えると、そこには息を切らしながら駆け寄って来る咲の姿が……。

「ハア……ハア……」

「随分息切らしてどうしたんだ？」

「どうしたって？和人も見に行くんでしょ？リクト君の試合」

「ああ！あれだけ強いリクトとその川村って人とのバトル、何が何でも見逃せないからな！」

「私も同じ、よかつたら一緒に行こうよ？」

「おお、良いぜ！でも全速力で行くから、追いつけるか？」

「ええー！？まだ時間的には大丈夫でしょ？ゆっくり行こうよ？」

「仕方ないな」

そんなやり取りをしながら二人は試合場所である、バトスピショッ
プへと向かうのであった。

——バトスピショップ。

「いらっしやい」

舞台は変わりバトスピセンター、店内にまた一人と入店者が入っていく。

客も増え、店長である村井はかなり陽気な様子。

今現在店内にはかなりの客が来ている。

いや、大半は和人達と同じリクトとか川村の試合を見に来た観戦者と言っていいだろう。

既にたくさんの人が来ているなんて事も知らず、遅れて和人と咲も入店してくるのだが……。

「いらっしやい……って、和人君と咲ちゃんじゃない？随分遅かったね」

「随分ってそんなに遅かったですか？」

「まあ、他の人たちはとっくに来てるよ」

咲の言葉に村井は言うと、既にほかの客達がたくさん来てる事に和人は気づく。

「うわあ、随分人で一杯。やっぱり早く来るべきだったよ」

「ごめんね」

額から流れる冷や汗を拭きながら言う咲。

『おい！和人！咲！』

「リクト！？」

振り向いた咲には、観戦者達を押しわけ、こっちに向かって来るリクトの姿が……。

「やっぱり見に来てくれたんだな」

「当然！お前の試合楽しみにしてるんだからな！」

「サンキュー」

和人の言葉に、リクトは笑いながら礼を言う。

「リクト君、随分自信があるみたいね？」

「当然！この日のために、デッキ構築は完璧に済ませたからな」

「へえ……」

「まっ、とは言っても気が抜けない試合になりそうだな」

「とにかく頑張ってね」

「おお。じゃあ俺、戻る。相手もそろそろ来る頃だしな」

「リクト！」

咲に言うと、リクトは戻ろうとするが、和人はそれ呼び止める。

「絶対勝てよ！俺、応援してるから！」

「ありがとな、力の限りつくしてやる」

軽くサムズアップを決めて和人に言うと、リクトは和人達の元を後にする。

”ウィーンッ!”

「いらつしゃ——」

お客かと思つて挨拶をしようとする村井、だが店内に入ってきた人物を見て一瞬言葉を詰まらせる。そして他の観戦者達も気づいたのか、その人物を見た瞬間、一気にざわめきがなくなる。

まさしくその人物こそ、これからリクトと戦う相手である川村劉だ

った。

（あれが、前のチャンピオンシップでリクトと戦った川村って奴か）
和人達は川村の姿を見て、すぐに川村が強者であることを感じ取る。
川村は、つかつかとリクトの前まで歩み寄っていく。

「随分待たせて悪かったね」

「いや大丈夫。それより役者はそろったし、始めようか？」

「ああ。少なくとも前のバトルよりかは楽しませてよね？」

お互いデッキを取り出し、互いの対戦者を睨む。

「始めるぞ！」

「ああ、いつでも」

「「ゲートオープン解放！」」

二人の言葉と共に、光に包まれ、リアルバトルフィールドへと舞台を移す。

『チャンピオンシップ出場者同士のバトル、どっちが勝つんだろう？』

『やっぱリクトじゃない？ストライクとセイバーシャークの合体アタックで一気に勝負を決めるさ』

『いや、川村かな？あいつのTV試合を見たけど、オリハルコンやアレクサンダーを使つてのデッキ破壊は強烈だぜ？』

観戦者達はモニターでリクトと川村の様子を見ながら試合結果を予想する。

それを聞いてたのか、咲達も……。

「ねえ和人はどっちが勝つと思う？」

「うーん、青のデッキ破壊は強力だけど、白はそれに対抗できるカードとかもあるからな。どっちが勝ってもおかしくない、すごい試合が期待できるぜ！」

「それじゃあ、俺からの先行で始めるぜ？」

「構わないよ」

第一ターン、リクトの先行で始まり、フレスヴェルガーを召喚してターンエンド。

第二ターン、川村はネクサス”崩壊する戦線”を配置してターンエンド。

第三ターン、ノーザンベアードを召喚して、フレスヴェルガーをLv・2にし、アタックステップへ。

「行け、フレスヴェルガー！」

「ライフで受けるよ」

フレスヴェルガーは翼を羽ばたかせ、川村に接近し、手に持っている銃を連射し、何発もの銃弾が展開されたバリアを撃ち抜いていく。

「ぐっ！」

後ろに後退させられるほどの衝撃と共に、ライフが減少し、残りライフは4。

「俺はこれでターンエンド」

—— 第4ターン。

「ふん、まだまだこんなもんじゃ押しきれないよ？ スタートステップ！」

コアステップ、ドローステップを行った後、コアは7個、手札は5枚となる。

「リペアリングセーラスと、レチクルアームズを召喚！レチクルアームズの召喚時効果で相手デッキを三枚破壊！」

青いサファイアが二つ砕け、そこからリペアリングセーラスとレチクルアームズが出現し、さらにレチクルアームズの効果で和人のデッキから三枚のカードが破棄される。

「デッキ破壊、始まったか」

「まだまだ行くよ、ラッコセルアを召喚して、バーストをセット！」

（！）

リクトはそれを何かを警戒してるかのように眉間に皺を寄せる。

「行くよ、レチクルアームズとリペリングセーラスを合体（プレイヴ）！」

レチクルアームズとリペアリングセーラスが合体し、レベルも2となり、BPは6000とパワーアップする。

「アタックステップ！合体スピリットでアタック！レチクルアームズの合体時効果で粉碎を発動！さらに崩壊する戦線の効果で粉碎で破棄する枚数を2枚追加」

・【粉碎】効果説明。

【粉碎】を持つスピリットのアタック時、そのスピリットのレベルと同じ枚数デッキを破棄する。

「粉碎を得ているリペアリングセーラスのレベルは2、よって二枚デッキを破棄、さらにリペアリングセーラスのアタック時効果でデッキを一枚破棄！さらにバーストをセットしてるため、コアを一つ、リペアリングセーラスに追加！」

リペアリングセーラスはそのままリクトに向かって駆け出すと、青い波動を放ち、それにより再びデッキから合計5枚のカードが破棄され、破棄されたカードの内、3枚はメガロックとフィアラル、レヴァティンのカード。

「ラッコセルアの能力発動、自分の粉碎を持つスピリットのアタックでスピリットカードを破棄した場合、コアを一つ追加する事ができる、よってリペアリングセーラスにコアを追加」

「攻撃はノーザンベアードでブロック。ブロック時効果でコアを一

つノーザンベアードに追加、よってレベルアップ!」

向かって来るリペアリングセーラスをノーザンベアードが迎え撃つが、BPはリペアリングセーラスが上で、そのままリペアリングセーラスのドリルに貫かれ、破壊されてしまう。

「これでターンエンド」

”わあああああっ!”

まだ序盤の内から、白熱した試合の展開に観戦者達は盛り上がっていた。

「すごいぜ、どっちも!」

「うん、それにリクト君や川村って人も、ノーザンベアードやリペアリングセーラスを使ってコアを積極的に増やしてるね」

「よく見てるな咲!」

「まあね」

「でも、一件川村が有利に見えてるけど、このターンで手札を4枚も使用したのは痛いぜ？ 対するリクトは手札を十分に所持してるし、まだまだ巻き返せるさ」

そんな事を言いながら二人は真剣に、モニターから行われる二人の試合を見る。

第5ターン。

「スタートステップ！」

リクトはその後、コアステップ、ドローステップを行う。

コア6個↓7個。手札4枚↓5枚。

そしてその後、リフレッシュステップで疲労しているフレスヴェルガーが回復。

「俺はフレスヴェルガーをレベル3にアップ」

コア3個が置かれ、フレスヴェルガーはLv・3となる。

「これでターンエンドだ」

「もう終わり？」

「作戦だよ、作戦」

——第6ターン。

「ふん、でも動かないのなら逆にそれを利用させてもらおう？」

「？」

「スタートステップ！」

コアステップ、ドローステップを行い、コアは10個、手札は2枚となり、その後リフレッシュステップを行い、リペアリングセーラスは回復。

「合体スピリットをLv・1にダウンし、ネクサス」 柱岩の海上

都市”を配置、そしてマジック、ハンドリバーズを使用！」

「!?!、緑マジック！」

・ハンドリバーズ『効果説明』。

メインの効果、自分の手札を破棄し、その後、相手の手札と同じ枚数になるまでドロー。

「こつちの手札はハンドリバーズを使用して0になってるから、破棄する手札はない。そしてそつちの手札5枚と同じになるよう、こちらの手札を5枚ドロー」

手札0から一気に5枚となり、それにはリクトも驚く。

「ハンドリバーズも仕込んでいたなんてな」

「まあ青は手札消費が激しいからね、十分大切な一枚となっている。まあ続けようか」

5枚となった手札を見ながら川村は考え込む。

「それじゃあ、アタックステップ！リペアリングセーラスを再びレベル2して、アタック！」

リペアリングセーラスは川村の攻撃宣言と共に駆け出し、再びアタック時効果で合計5枚のカードが破棄され、コアが一つリペアリングセーラスに追加、さらに破棄したカードにスピリットカードがあるため、コアが一つラッセルアに追加される。

「ライフで受ける！だが、フラッシュタイミング！デストラクションバリアを使用！」

「！」

「効果は前にも使った事があるから知ってるよな？転召を持たないリペアリングセーラスのアタックでライフが減った時、リペアリングセーラスを破壊する」

リペアリングセーラスのドリルが展開されたバリアに直撃する。

「ぐあっ！」

衝撃と共に痛みがリクトを遅い、残りライフは4つとなる。

しかしデストラクションバリアの効果でリペアリングセーラスは破壊され、分離したレチクルアームズが場に残る。

「これでターンエンド」

—— 第7ターン。

リクトはメインステップまでの準備を進め、コア、ドローステップを行った後、コアは9個、手札は5枚となる。

「メインステップ！フレスヴェルガーをレベルダウンして、”無限なる軌道母艦”を配置！」

フレスヴェルガーはレベルは1となるが、代わりにリクトの場にネクサスが展開される。

「さあて、掃除の時間と行くか！鳳凰龍フェニックスを召喚！召喚時効果で、レチクルアームズとラッコセルアを破壊する！」

赤いルビーが砕け、フェニックスが出現し、出現と同時に空を舞い、地上にいるラッコセルアとレチクルアームズに火球弾を放つていき、破壊する。

「そしてガドファントを召喚して、ターンエンド！」

白いダイヤモンドが砕け、鳴き声尾を上げながらガドファントが出現する。

第8ターン。

メインステップまでの準備を終え、コアは12個、手札は6枚となる。

「メインステップ！じゃあそろそろ行こうか！ロックゴレムを召喚！ネクスス”柱岩の海上都市”の効果で、粉碎を持つロックゴレムの召喚でデッキを二枚破棄」

再び和人のデッキから二枚のカードが破棄され、ここまでで計15枚のカードが破棄されている。

「行くよ！天を貫く一本槍を使い、世界を揺るがす皇しき巨人！巨人大帝アレクサンダーをレベル2で召喚！」

突如光の柱が天から降り注いだかと思うと、大地を揺らす程の大きさを誇るXレア、巨人大帝アレクサンダーが出現する。

「さすがXレア、しかも巨人大帝ともなるとさらに大きく感じるな」

「ふっ、まあ続けよう！アタックステップ！巨人大帝アレクサンダーでアタック！さらに強襲発動！」

・【強襲】効果説明。

アタック時、ネクサス一つを疲労させる事でこのスピリットは回復する。

「ネクサス、崩壊する戦線を疲労してアレクサンダーを回復！さらにLv.2、アタック時効果でコスト4以下のスピリットを一体破壊する！」

「ちっ！」

アレクサンダーは駆けだしながら、槍を構え、それを勢いよく投げつけ、フレスヴェルガーを貫き破壊する。

「さらにこの効果で破棄したスピリットのコストと同じ枚数破棄、フレスヴェルガーのコストは3。よって3枚！」

リクトのデッキから再び三枚のカードが破棄される。

「そしてメインのアタック！」

「ガドファントでブロック！」

アレクサンダーはそのまま向かって来るガドファントを踏みつけ、破壊する。

「まだアレクサンダーは止まらない！もう一度行け！そして再び強襲の効果、柱岩の海上都市のを疲労させてアレクサンダーを回復！」

「ライフで受ける」

アレクサンダーは止まる事なく駆け出すと、そのまま槍を突き出し、展開されたバリアを突き刺し、リクトのバリアを砕く。

「ッ！」

残りライフ4↓3。

「ターンエンド」

——第9ターン。

リクトはメインステップまでの準備を終え、コアは11個、手札は3枚。

「さて、まさかここまで長期戦になるとはな」

「まあ、お互いここまででは場を固める戦術で動いてるからね」

「でも今は互いにコアも手札も貯まってる」

「ああ、だからここからが本番だね」

「その通り、お前がアレクサンダーを呼んだように、俺もこのバトルで選んだキースピリットを呼び出す」

「へえ、ストライクジークブルムでも呼び出す気？」

「違う、言つたろ？このバトルで選んだキースピリットってな！」

3枚の内の一枚に手を掛け、リクトは笑みを浮かべる。

「さて、俺も決め台詞って奴、決めてみるか」

「よほどすごいものが出そうだね」

「行くぞ！白き鎧を身に纏い、この地に光をもたらせ！水瓶座の光より、宝瓶神機アクアエリシオンをここに！！」

「！、十二宮Xレアか」

突然空に水瓶座が浮かび上がり、その水瓶座から水流が現れ、その水流から光る眼が出現したかと思うと、水流を打ち払い、アクアエリシオンLv.2が水飛沫を浴びながら姿を現す。

「俺はこれでターンエンド」

「?、そこまでのスピリットを出しておきながら何もしないのか?」

「今アタックしても、アレクサンダーに阻まれる」

「ふん、臆したとみていいか?」

「さあな、ともかくターンエンドだ」

第10ターン。

スタートステップ後、コアステップ、ドローステップを行ってコア

は13個、手札は5枚。

そして次はリフレッシュステップを行うのだが……。

「じゃあ、疲労状態のネクサスとアレクサnderを回復させる」

「いや、ネクサスは回復できないぜ？」

「！」

「アクアエリシオンの効果、リフレッシュステップ時、お互いスピリットは一体しか回復できず、ネクサス全ては回復できないって効果だ」

「ちいつ」

「まあ俺のデッキはネクサスが回復できなくても困らないが、そのアレクサnderみたいに【強襲】を持ったスピリットを入れてるデッキには致命的だな？」

「ふん、ネクサスは疲労していても効果は持続するし、それにネクサスをまた出せば問題ない」

（切り替えが早い、あまり動揺は誘えないか）

「続けるよ、メインステップ！ネクサス”造兵工房”を配置し、ライノセーラスを召喚」

再びネクサスが配置され、さらにライノセーラスが出現する。

「さあ行くよ、青き巨人、爪を振るいて全てを壊せ！神造巨兵オリハルコンゴレムを召喚！」

青のサファイアが砕けると、突如地割れが起き、その地割れからオリハルコンゴレムが唸りと共に出現し、ネクサスの効果が発動。粉砕を持つスピリットの召喚でまた二枚のカードがデッキから破棄される。

「そしてアレクサンダーをレベルダウンさせ、ライノセーラスに3コア、オリハルコンに1コア追加して二体をLv・2に！」

コアが追加され、アレクサンダーは力が抜けるも、二体はレベルアップする。

「出たな、二体目のキーカード」

「ふん、アレクサンダーとオリハルコンゴレムをフィールドで揃えられるなんてほんと久々だよ。二体のXレアを呼び出させるでなんて、随分成長したみたいだね」

「俺の成長はんなもんじゃない。お前に勝つ事だ」

「それは無理、だって前の時と同じように、オリハルコンゴレムで

ジエンドだからね。アタックステップ。オリハルコンゴレムでアタック！」

オリハルコンゴレムは目を光らせ、リクトに迫ると同時にその力を発動する。

「オリハルコンゴレムは粉碎で二枚、さらに青のシンボル一つにつきデッキを一つ破棄する効果、今青のシンボルはネクサスが3枚、スピリットは自身を含め4体、さらに崩壊する戦線で二枚追加して合計11枚破棄、さらに強襲でオリハルコンゴレムは回復するからライフにしてもデッキにしてもこのターンで終わり！」

「いや、ただだぜ」

「？」

「フラッシュタイミング、エターナルシールドを使用！」

「エターナルシールド！そんなカードを入れてたのか？」

「そ、お前対策その？だ」

・エターナルシールド効果説明。

このターン、自分のデッキは6枚以上破棄されない。

「だからオリハルコンゴレムの効果で俺のデッキは6枚しか破棄できないうえ、もう何をしてもこれ以上は破棄されない」

「ちいつ、だけどオリハルコンゴレムのアタックは継続中！」

「ライフだ」

オリハルコンゴレムの振り下ろした爪がリクトのライフを砕き、残りライフは2つとなる。

「ッ！」

「このターンで決める！ロックゴレムでアタック！」

「ライフ！」

今度はロックゴレムの拳がライフを砕き、残りライフは一つとなる。

「行け！ライノセーラス！！」

ライノセーラスは頭部のドリルを回転させながら駆けだし、リクトへと迫る。

「アクアエリシオンでブロック」

だがライノセーラスがドリルをリクトに突き刺す前に、アクアエリシオンは刃でドリルを受け止める。

「フラッシュタイミング、サイレントロックを使用」

「！？」

「合体していないスピリットのバトル終了時、相手のアタックステップを強制終了させる」

「ここまで追い詰めたのに……！」

拳を握りしめながら、サイレントロックを恨めしそうに睨む。バトルの方では、BPが低いライノセーラスが不利で、アクアエリシオンの刃に切り裂かれ、ライノセーラスは爆発四散する。

「エターナルシールドの効果でライノセーラスの効果は不発。ターンエンドか？」

「ああ」

——第11ターン。

「さあて、そろそろ、終わらせようか!!」

コア13個↓14個。 手札1枚↓2枚。

「ここから大逆転と行かしてもらっぜ！」

自分の場のアクアエリシオンは回復し、リクトは逆転宣言をし、勝利を確信するのだった。

第5話『川村VSリクト！ 青と白の大激突！』（後書き）

リクト「おいこら作者！何でここで終わりだ？」

作者「だってあまりに長文なりすぎたのでこころで一回区切らないとね？」

リクト「続きはいつ？」

作者「大丈夫、大丈夫明日目では」

和人「ていうーか、俺の出番は？」

作者「という訳で、第5話は中途半端ですが、このあたりで区切らせていただきます。この続きは次回の第6話でぜひご確認ください！」

和人（この野郎……！無視しやるがとはいいい度胸だ）

咲「ま、まあ！リクトVS川村、次回決着なので続きをこうご期待ください！それでは次回もゲートオープン、解放！」

いかがでしたでしょうか？第5話！

川村VSリクトの大バトル！

川村のキースピリット、オリハルコン&アレクサンダーに対し、リクトは新たなキースピリット、アクアエリシオンで対抗！

第3話でリクトがアクアエリシオンを必要としていたのは川村とのバトルのためだったからでした。リクトと川村とのバトル、次回でついに決着ですのでぜひ一目見ていただければ嬉しい限りです。

次回第6話『十二宮バトル！天秤造神リブラゴレムVS宝瓶神機ア

クアエリシオン
『
ぜひご期待ください！

第6話『十二宮バトル！天秤造神リブラゴレムVS宝瓶神機アクアエリシオン』

どうもブラストです！

昨日言った通りなんとか今日中に書きあげる事が出来ました。

そして今回はリクトと川村がついに決着！面白さは保証しかねる作品ですが、一目見ていただければ嬉しい限りです。

それと一応見直しましたが、誤字脱字ございましたら申し訳ございません。

それではどうぞ、小説をお楽しみください。

第6話『十二宮バトル！天秤造神リブラゴレムVS宝瓶神機アクアエリシオン』

「メインステップ！マジック、フォースドローを使用！」

「赤のマジック？」

「こいつの効果は、自分の手札が4枚になるまでドローする事が可能、よって3枚ドロー！」

三枚のカードを手札に加え、リクトは笑みを浮かべる。

「このターンで決められそうな手札来たの？」

「……思ってた以上に巡りが悪いので、このターンでの決着は無理そうです」

”ズコッ！”

リクトの言葉に、モニターを見ていた全員が思わずずっこける。

「無理だったら、カッコつけて言ってるじゃねえよ！」

素早く突っ込みを入れる和人。

モニターでは、少々苦笑いしながら頬を掻くリクト。

「まあこのターンで終わらせるってのは確かに大口だったが、このターンで勝負を動かせるって事はできそうだぜ？」

「何言ってるの？もうハツタリなら通じないよ」

「手札もコアも十分にあるんだ、ハツタリかどうかすぐに見せてやるよ」

そう言うトリクトは手札からフェニックキャノンとアクアエリシオンを合体（ブレイヴ）させる。

「そして合体スピリットをLv.3にして、突機龍アーケランサーを召喚！召喚時効果でデッキから1ドロー、さらに相手ネクサス一つを破壊、ネクサスは崩壊する戦線を指定！」

アーケランサーの出現によってネクサスは破壊される。

「ちっ！」

「アタックステップ！アクアエリシオン、やれ！」

「ライフで――」

「無理だな。フェニックキャノンの効果で【激突】を得ている」

「！、勝負が動くと言うのは、こつ言う事か」

「ご名答、さらにおまけでダイヤモンドストライクを使用！武装を持つアクアエリシオンを攻撃後に回復し、再度アタック！」

「……最初から、キースピリットであるアレクサンダーとオリハルコンゴレムを潰すのが狙いつて事か」

「それもお明察」

アクアエリシオンは腕の形状を変え、アレクサンダーにロックすると、荷電粒子砲を放ち、それは一直線にアレクサンダーを捕え、直撃を喰らい大爆発が起こる。

「ダイヤモンドストライクの効果で回復してるから、もう一度だ！」
今度は標準をオリハルコンゴレムに合わせると、再び荷電粒子砲を
放ち、それに貫かれて爆発四散する。

「もう一枚ダイヤモンドストライクを使用」

「！」

「不足コストはアクアエリシオンから代用でレベルダウン、そして
マジックの効果でアクアエリシオンを回復させ、ターンエンド」

（オリハルコンとアレクサンダーが一気に片付けられるなんて……
軽率なプレイングはしなかったのに、まさか反撃されるなんて、だ
がまだ勝てる可能性がない訳じゃない）

その後、川村はコア、ドローステップを行い、コアは14個、手札
は3枚。

そしてリフレッシュステップを行い、ロックゴレムは回復。

（さて、相手のブロッカーが二体でライフは1。こちらは現在一
体だけだが、後二体のスピリットを呼んでフルアタックすればこの
ターンは決まり。だが問題はあいつの二枚の手札だな）

川村はリクトの手にある手札を見ながら考え込む。

（さて白デッキと言えば、スピリット回復やライフ回復マジックが
多くある、リクトの手札にあるのは、ホーリエリクサーやハイエリ
クサーだろうか？ いや、さっきの攻撃終了時、ダイヤモンドスト
イクを使用したのが引っ掛かるな）

川村は第11ターンでのダイヤモンドストライクの使用が妙に引っ
掛かっていた。

（普通なら、回復系マジックはカウンターに使う時が多い、けどあいつはそれをしなかった。つまり、さっきのダイヤモンドストライクは、もう手札に回復系マジックがないと思わせるためだろう）

この川村の読みは実際当たっていた。

リクトの手札には確かに、スピリットを回復させるマジック、リブートコードのカードが……。

「（下手にアタックせず、この場合はブロッカーを並べておくか……アレクサンダーとオリハルコンを失った今、奴が来ないと、決定打に欠けるしな）メインステップ！ ストンスターチュを召喚、召喚時効果でデッキを一枚破棄、ターンエンド」

「軽量スピリットの壁で守り切れるのか？」

「心配ご無用、ライフは4つあるんだからブロッカー二体で十分鉄壁、それに……」

（！）

一瞬、自分のセットしているバーストを見たのをリクトは見逃さなかった。

（奴のあのバースト、あれが鍵だな）

——第13ターン。

リクトはメインステップまでの準備を進め、コアは15個、手札は3枚。

（さて、奴はロックゴレムもストーンスターチュもレベルアップする様子はなし、まるでアタックしてくださって言うてるような状況、つまり奴のバースト、あれは自分のスピリット破壊時か、ライフ減少時だな……ライフ減少時で発動する青のバーストは確か、雷神轟招来。破壊時なら退魔絶刀。いや、ハンドリバースなんかの緑マジ

ツクが入ってたように、他の色のバーストとも考えれる、今まで使わなかったのはそのタイミングを見計らっているから。だったら白の真骨頂を見せるのみ！)

リクトは自分の手札を見ながら今後の動きを考える。

「(勝てる状況は今の手札じゃ作れない、だがこいつであれを引き当てれば！)メインステップ！突機龍アーケランサーを召喚！」

「！」

「召喚時効果で、柱岩の海上都市を破壊し、1枚ドロー！」
二体目のアーケランサーの出現で、再びネクススが破壊される。

「やはり予想してた通り、召喚時効果がバーストの引き金じゃないみたいだな」

「……………んな事より、二体目のアーケランサーを召喚するって、よほどこのターンで加えたい一枚があるみたいだね」

「まあな、アーケランサーの効果が一枚引く(頼む、来てくれ！)」

カードをドローし、引いたカードはデスヘイズのカード。

（ちい、このカードじゃ……！、いや待てよ！）

何かを思い立ったのか、リクトはデスヘイズのカードを掴む。

「一か八か、こいつであれを引き当てて、このターンで決着をつける！デスヘイズを召喚！」

「！」

「召喚時効果、自分のスピリットを好きなだけ破壊し、破壊したスピリット一体につき一枚ドロ、よって二体のアーケランサーを指定！」

デスヘイズの効果によって二体のアーケランサーが破壊される。

「ほとんど破棄されてるそのデッキでまたドロ、自分で自分の首を絞めるようなものだよ？」

「いいや、これが勝利につながると俺は信じてる！」

一枚目のカードを引き、そのカードはインビシブルクローク、そして二枚目、そのカードは……。

「来たぜー！ーッ！こいつで決める！鉄器皇イグドラシルLv.2召喚！」

「そ、そいつがお前の待っていた一枚……！」

「そうさ、こいつで幕を下ろせる！召喚時効果で、ロックゴレムとストンスターチュを手札に！」

イグドラシルは剣を勢いよく振り下ろし、それにより生じた衝撃派に二体は吹き飛ばされ、手札に戻る。

（これで相手のブロッカーは0、後はデスヘイズをイグドラシルに合体させてアタックし、このリブートコードを使えば！）
自分の考える戦略でなら一気に勝負を決められる。

ようやく川村にリベンジが返せると思うと、嬉しくてたまらない。

「ふっ……あは、ははははは」

だが、そんな中、突如川村から笑いがこぼれる。

「何がおかしい？」

「えっ？おかしいったらないよ、もしかしてこのターンで決められると考えてる？」

「だとしたら？」

「それは無理って教える事になる」

そう言いながら川村は自分のバーストを見る。

「そのバーストがどうかしたか？イグドラシルの効果でブロッカーを手札に戻したから、破壊時に発動するバーストはもはや意味がない！おまけに例えそれがライフ減少時発揮だろうと、こっちはイグドラシルの効果で自身とアクアエリシオンは装甲持ちだ！」

「ふふっ、このバーストはライフ減少時でも、スピリット破壊時でもないよ？」

「何っ？」

「既にそっちはトリガーを引いてるしね」

「ま、まさか……！」

「お前の予想通り、このバーストのトリガーは……相手の召喚時効

果発揮だ!!」

「嘘、だろ!？」

「バースト発動で、封渦斬を使用!これにより相手はこのターン、マジックを使用できない」

「マジック……を!？」

「さっき『決着をつける』って言ってたよね?そっちは合体スピリットとブレイヴのデスヘイズ、イグドラシルが場に居る状態、この状況で決着をつけるって事は、リブートコードを使用する気だったのかな?」

「ぐっ……!」

「その様子だと、凶星みたいだね」

「ちッ、ターンエンド」

「あれ?何もしないの?」

「マジックが使用できない状況じゃこのターンを決められない。それに、今の状態だとブロッカーを残した方が得策だからな」

「ふっ、かなり動揺してたみたいだね、まだ対して冷静力は失ってないみたいだね」

川村の余裕の様子。

しかし封渦斬をやられての動揺はリクトにとって確かに大きいものだった。

一瞬見えた勝利を再び消され、もう負けてしまったような想いが浮かんできた。

しかしリクトはすぐに我に返り、落ち着きを取り戻していく。

（まだだ……まだ勝てる可能性がなくなった訳じゃない、俺のデッキはもう10枚を切ってるが、手札にあるもう一枚のエターナルシールドを使えば！次の俺のターンまで回れば勝負を決められる！）

希望を捨てず、力強い眼差しで川村を見る。

——第14ターン。

「スタートステップ！」

メインステップまでの準備を終え、コアは15個、手札は5枚となる。

「ふつ、じゃあこのターンでフィナーレと行こうか！」

「ふん、どうかな？俺の手札に二枚目のサイレントロックがあるかもしれないぜ？」

「だとしても、大丈夫さ」

「？」

「メインステップ、絶望と希望を天秤に掛ける神！天秤座の光より、天秤造神リブラゴレムLv.3をここに！」

「！、お前も……十二宮Xレアを！」

「デッキに入れてるのが自分だけだと思ってた？言っとくけど、これが俺の真打ちだ」

地上に流れ星のような物が降り注ぎ、それが天秤座を形成したかと思うと、そこに輝が入り、天秤造神リブラゴレムが地面から出現する。

「来るなら来い！」

「ふん、焦らないですよ？さっき言わなかった、サイレントロックがあっても大丈夫だって？」

「どついう意味だ？」

「すぐに分かる、残りのコアすべて使用して雷神砲カノンアームズを召喚！」

「そ、そのブレイヴ!？」

「カノンアームズとリブラゴレムを合体して、BP17000」

「!」

「アタックステップ、行け！合体スピリット!!アタック時、カノンアームズの合体時能力発動！」

「確かそいつの能力はアタック時、相手デッキを一枚破棄」

「それだけじゃない、このバトルの間、相手は、このスピリットの効果で破棄したカードと同じ色の手札のカードを使えない。そしてリブラゴレムはLv.3で粉碎持っているから計4枚する」

4枚のカードがデッキから破棄され、そのカードは白のセイバーシヤーク、紫のデスヘイズ、黄色のペリユートン、そして最後のカー

ドは白のストライクジークヴルム。

「ストライク！」

「ふん、出たカードは白、紫、黄色、よってその色の手札のカードを使用できない」

「ぐっ……（これじゃあエタールシールドを使用できない）」

「まだ続くよ、リブラゴレムはスピリットカードを一枚以上破棄した時、回復。この効果で回復した時、ライフは削れないけどね」

さっきのストライクの破棄で、リブラゴレムは回復。これによりライフは減らされないも、再びリブラゴレムはアタックを仕掛ける。

「アタックで4枚破棄！」

今度はホーリエリクサー、フェニックスキャノン、レーヴァテイン、ミヨルニールが破棄される。

「カノンアームズの効果で赤のカードを使用できない、さらにレーヴァテインとミヨルニールの破棄でリブラゴレムは回復！さてそっちのデッキはラスト一枚だね」

「……来るなら来い！」

「言われなくても、リブラゴレムでアタック！」

再びアタックし、デッキから最後の一枚がトラッシュへ。
その破棄されたカードはデルタバリア。

「破棄されたカードがスピリットじゃないため、リブラゴレムは回復しない、ただこの場合リブラゴレムのアタックは成立、最後のライフを砕く！」

「攻撃はアクアエリシオンでブロック！」

向かって来るリブラゴレムをアクアエリシオンが迎え撃ち、剣でリブラゴレムを切り裂いていく。

しかしリブラゴレムは剣を防ぎ、アクアエリシオンを後方に弾き返す。

「どちらも十二宮Xレアで合体スピリットだけど、そっちのアクアエリシオンはLv・2でBP合計は11000、こっちはLv・3でBP17000、勝負ありだね」

「ぐっ！」

リブラゴレムはカノンアームズの銃口をアクアエリシオンに、アクアエリシオンは腕の形状を変え、標準をリブラゴレムに合わせ、どちらも強力な荷電粒子砲を放つ。強力なエネルギー同士の激突、しかし徐々にアクアエリシオンの方が押されていき、最後にはリブラゴレムの攻撃に競り負け、荷電粒子砲がアクアエリシオンを貫く。

「フェニックキャノンを分離！」

フェニックキャノンがアクアエリシオンから離れた瞬間、アクアエリシオンは大爆発を起こす。

「これでターンエンド」

次はリクトの番なのだが、デッキが0となりリクトの負けが確定する。

決着が着き、バトルフィールドから戻ってきた二人。
しかし勝敗にかかわらず、大迫力の試合を展開した両者に凄まじい
程の歓声と拍手が送られる。

「また勝てなかったか。それでもデッキ調整はかなりやったんだが

な」

「まあ封渦斬の効果がとても効いたね」

「だが、そんなことより聞きたい事がある」

「ん？」

「第13ターンの時、何で封渦斬を直ぐに使わなかった？デスヘイズやアーケランサーの時も使用できたはずだろ？」

「相手のデッキを存分に引き出させて、叩き潰す」

「？」

「そう言う戦い方してる人が居るんだ、だからそれに憧れて、ちょっとやって見ただけさ」

「……なるほどな」

「まあ十分楽しめたよ。これなら来たかいがあるってもの」

少々笑いながら川村は歩きだす。

「あつ、そうだ。知ってる？もうすぐ二度目のチャンピオンシップ

が開催されるって事？」

「!？」

『!？』

それを聞いていた観戦者達も動揺を隠せなかった。

「何でそれを？」

「これが届いてんだから、大体分かる」

川村は懷から、ハイランカーパスを取り出す。

「!？」

「ともかく開催まで時間はそんなにないほうだから、お前も、ここにいる全員も精々それまで日々実力を上げていく事だね」

それだけ言うと、川村は後ろに振り替える。

「じゃあこの辺で、みんな精々チャンピオンシップ出場&好成績を残せるといいね」

それだけ言うと、川村はふと和人の方を向く。

「？」

「確か前にリクトとバトルして君、勝ったんだっただね？」

「な、何でそれを？」

「噂で聞いただけ。それがほんとならいつか君ともバトルがしたいよ、それじゃあ」

それだけ言った後、川村は店を出て、その場から立ち去っていく。

「り、リクト……惜しかったな」

和人と咲は川村が居なくなった後、リクトに駆け寄り言う。

「……オリハルコンやアレクササンダーを片づけた時は行けると思っ

「ただがな」

「リクト」

「なあに、心配しなくていいさ。リベンジのチャンスはいつでもある！次はチャンピオンシップがあるって言ってたろ？そこでリベンジするまでさ」

「たいして落ち込んでいる様子もなく咲も和人も安心する。」

「それよりお前等、こんな所でぼーとしてていいのか？」

「えっ？」

「ほら見てみるよ」

振り向いた先には、さっきまで観戦していた人たちが全員、カードを買ったり、デッキ構築したり、自分のデッキを試すフリーバトルなどをしていた。

「！？」

「みんなもうチャンピオンシップのための準備を始めてる。俺も適当に何パックかかってデッキ構築でもするよ」

そう言いながら、パックを買いリクトはバトスピショップを後にした。

「よし！俺達もパック買おうぜ！」

「うん！」

すぐにレジの前まで行き、購入するパックを選ぶ。

「はいはい、いらっしゃい。咲ちゃんに和人君、どれにする？」

「じゃあ霸王編で」

「俺も！」

「ごめんね、霸王編もう一つしかなくて……」

「えっ！？もうそんなに売れたんですか！？」

「まあ商売繁盛するのは私としては嬉しい事なんだけどね」
冷や汗をかき、少々笑いながら咲に言う知恵。

「うゝん、じゃあ咲買えよ、俺は他のにするし」

「いいの？」

「まっ、前に霸王編買ったばかりだしな」

「じゃ、悪いけどお言葉にあまさせてもらいまーす！」

「はい、毎度あり」

霸王編を購入する咲、しかし和人は何かを決められずにいた。

「うゝん……うゝん」

「か、和人……やっぱり私が買っちゃて悪かった？」

「嫌んな事ないって、俺はこれに使用！」

咲に余計な気を使わせまいと和人は適当に指を示す。

「これって、第6弾ね。はい毎度あり！」

「和人、また古いカード？」

「い、いいだろう別に！エクスキヤリバスみたいに、この中に何かを感じるカードがあったりするかもだし」

「私先に開封するよ？」

和人が購入してる間に、咲はパックを開け、中身を確認する。

「やったあー！ー！風の霸王ドルクス・ウシワカGET！」

「えっ！？マジ！？」

和人も購入したパックを持ちながら、咲に近寄る。

「うん、私これ、和人のエクスキヤリバスみたいに、何かビビッて感じた！これが運命の一枚を手に入れた快感ってことかな？」

「いいな、風の霸王」

「これを早速試そうっと！」

すると咲は迷うことなくドルクスをデッキの中に入れる。

「試すんだつたら俺とバトルしようぜ！」

「いいけど、中身確認しないの？」

「バランスが崩れるかもしれないから直ぐに入れる訳にいかないし、
ともかく俺は早くバトルがしたいんだよ！」

そう言いながら、和人は購入したパックを開封しないまま、懐にし
まう。

「まあいいけどね！私が今日手に入れた運命の一枚、ドルクスに勝
てるかな？」

「どうでもいいけど、そいつがもう運命の一枚！？」

「うん、本気で何かを感じたんだよね。このカードに」

「へえ、でも！俺のエクスカリバスが負ける筈ないぜ！」

早速台座について、バトルを開始しようとする和人と咲。
だが、そんな時……。

『はい！みなさん注目！！』

突然、お客達のバトルを止めるように知恵の声が入る。

『バトル中申し訳ないんですが、ちょっとお知らせしたい事があります！』

「？」

『明日、この近くで新しくオールフィールドという場所がオープンします！』

「「オールフィールド？」」「」

第6話『十二宮バトル！天秤造神リブラゴレムVS宝瓶神機アクアエリシオン』

はい！第6話はここまでです！

いかがでしたでしょうか？リクトvs川村、ついに決着！

リブラゴレムとアクアエリシオン、やはりこの二体、今もなお強力な力を誇っています。

そして咲もここで運命の一枚、ドルクスを入手！

今はまだ実力的に不十分な彼女ですが、ドルクスと出会い、今後どう成長していくか、ぜひご期待ください！

和人「さて、ここからは俺達が、今回店長が言ったオールフィールドとは何なのか！次回、俺達はそのに言って来るぜ！」

咲「次回の話は第7話『オールフィールド突入！ 龍の霸王咆哮』」

和人「これからもよろしくな！」

咲「ぜひ、応援よろしくお願いします！」

第7話『オールフィールド突入！ 龍の霸王咆哮』（前書き）

ようやく書き上げました第7話！早速公開いたします！

今回は和人達がオールフィールドという新たな施設に行く事に！？

そして見どころのバトルは、サブタイトルで分かる方もいると思いますが、あの霸王が登場！ぜひ一目、見てくださるとうれしい限りです。

第7話『オールフィールド突入！ 龍の霸王咆哮』

「ここ、だよな？」

地図を見ながら目の前にあるビルのような建物を見る和人。
周りを見てみると、そこにはデッキケースを取りつけている和人と
同じカードバトラーがたくさんその建物の前に並んでいたので、和
人の目的地はここで間違いないだろう。

「和人！」

「ん？咲？」

後ろを振り変えれば、そこには咲の姿が……。

「随分遅い到着だな？」

「ちゃんと言わなかった！ちょっと待ってって」

少し口論をしている様子の二人。

実はここに来る前、二人は一緒に行く予定だったらしいのだが、和人が咲を置いて咲に来てしまったらしい。しかしこの前のように、咲のせいで遅れる訳にはいかず、和人の行動が必ずしも悪い訳ではないのだが……。

「まあともかく、ここで合流できた訳だし、そんなに怒る事ねえだろ？」

「はあ、つたくほんと相変わらずって言うかなんて言うか……」

呆れた様子で、和人に対し大きくため息を突く咲。

「それより、ここだったよな、昨日知恵さんが言ってたオールフィールドって」

「多分、他のカードバトラー達もここに来てるし間違いないんじゃない？」

今、和人達が来てるのはオールフィールドという建物の前。

実は昨日、知恵がオールフィールドの事を発表した後、その場所を記した地図を全員に配り、その開店時間を全員に教えたのだった。

そして開店時間まで残り10分を切り、今か今かとその時を待っているのだった。

「にしても、オールフィールドって一体どんな場所なんだろう？」

「さあね、知恵さんの言葉からしてきつともうすぐ始まるチャンピオンシップの実力試しの事でみんなをこの場に招いたんじゃない？」

「でも、ただの実力試しなら、普通のバトスピショップでも断然いいんだけどな」

「確かにそれもそうだね」

和人に言いながら、咲もオールフィールドがどんな所なのか気になっていた。

ふと二人は辺りを見回すと、リクトの姿が目に入る。

「あれって！リクト！？」

「リクト君も来てるんだ……やっぱりそれだけみんな注目するべき場所なのかな？」

さらにリクトだけでなく別の場所では川村の姿もあり、それを見て

また二人は驚きを隠せない様子だった。

「川村まで何でここに？」

「ともかくあの二人も来てるって事は相当面白くなりそうってことじゃないのか！」

疑問に思う咲に対し、和人はリクトと川村の姿を見て、自分のデッキを握りしめながら早く戦いたいという闘士に駆られていた。

そしてしばらくしてようやく開店時間となり、中から二人程スタッフらしき人が現れ、扉を開ける。

『お待ちいたしました！オールフィールド開店時間です。列を守って、どうぞご入店ください！』

ようやく扉が開き、カードバトラー達はスタッフの指示に従ってその建物へと入店していく。

そして建物の中央のような場所まで全員案内され、その場所はまるで大広間のように広く、これから何かショーを始めるようなステージが目の前にあった。

「一体何が始まるんだろう？」

「さあな、ともかく早くバトルがしたいぜ」

そんな中、さっきまで暗かったその部屋全体に突如スポットライトがステージをてらす。

『レディースアード、ジェントルメン！ようこそカードバトルの皆様！！本日よりオープンいたしましたこのオールフィールドに！！』

そのステージに突如現れたのは、何と村井知恵！
その姿を見た時、和人や咲達はとても驚いていた。

しかしそんな二人の様子にお構いなしで、知恵はマイクを持ちながらさらに続けていく。

『ええ、前に私がこのオールフィールドについて説明し、それを聞いてか聞かずか……ともかくこのオールフィールドにたくさんの来場者が来てくれてほんとにうれしく思っています！そして今日のオールフィールドに素敵なゲストさんが来てくれます！』

ゲストと言つ言葉に全員ざわざわと少し騒ぎ始める。

『ではそのゲストさんを早速お招きしたいと思います、それではどうぞ！』

その言葉と共に、知恵の上にあつたモニターにジークヤマトフリードのシルエットが現れたかと思うと、ステージの奥からある人物が歩いてくる。

「「！」「」

その人物を見た時、思わずその場に居た全員が言葉を失つた。しかしそれに構う事なく知恵はマイクを片手にその人物の説明をする。

『本日のゲストさんは、相棒であるジークヤマトフリードと共に、世界チャンピオンに君臨する薬師寺アラタさんです！』

知恵の発表と共に、一瞬言葉を失っていた観客達はすぐさま大歓声を上げる。

「すっげー！すっげー！すっげー！！チャンピオンが来てるのかよ！！」

チャンピオンの登場に和人はどれほどテンションを上げた事だろう。隣にいる咲も和人に負けないうらいテンションが高まっていた。

そして勿論リクトや川村達もチャンピオンが居る事に驚いた様子だった。

世界チャンピオンの薬師寺アラタ。その存在を知らない者はおらず、誰もが一度は戦ってみたいと思い、そして誰もが憧れるカードバトラー。

『よお！カードバトラーのみんな、バトスピ好きか？』

「「おおー！ーッ！ー！」」

観客達全員、薬師寺アラタが居る事にテンションが高まっており、その場全体観客達の声が響く程だった。

『今日新しくオープンしたこのオールフィールド。今日は特別ゲストとして俺はここに呼んでもらった。そして早速だが、このオールフィールドが何をする場所なのか、簡単に説明させてもらおう』

知恵からマイクを受け取り、チャンピオンであるアラタがこの施設についての説明を始める。

『まずは知ってる人もいると思うが、このオールフィールドは近以内に開催されるチャンピオンシップのための腕試し的な施設だ。もうチャンピオンシップまで時間はないが、このオールフィールドでぜひ存分に戦い、レベルアップの場になればと思っている』

アラタは「さらに」と言葉を続けていく。

『このオールフィールドは、バトスピショップと同様カードを販売したり、バトル用の台座、そしてリアルバトルフィールドも用意している。しかしここまでは普通のバトスピショップと変わらない、ただ、このオールフィールドには最後に、特別なシステムを導入している』

頭に？を浮かべながらアラタの説明を詳しく聞いていく観戦者達。

『そのシステムはデータオールバトル、略してDOBと覚えてくれればいい。そのシステムは自分のデッキを専用の機械にセットし、自分のデッキのデータを読み取った後、対戦相手となりうるコンピュータのレベルをセットし、特別なバトルフィールドへと移動し、そのフィールドではデッキから読み取ったデータをそのフィー

ルドで扱うデッキとして用意する』

「あの、つまり……どういう事？」

「はあ……だからオールフィールドではコンピューターと戦う場所があつて、それと戦うためには自分のデッキを専用の機械にデータとして読み取ってもらい、特別なフィールドでその読み取ったデータのデッキを使つてことですよ？」

「そ、そうか」

和人は今一理解できてないながらも頷いて見せ、咲はそんな様子に若干呆れていた。

「でもさ、何でそんなことするんだ？データのデッキを使わなくても普通に自分のデッキを使えばいいのに？」

「それは……説明してくれると思うよ！」

「お前は知らないのかよ！」

『さてなぜわざわざデータのデッキを使うなんて面倒な事をするのか？そう思ったカードバトラーもいるだろう。その理由は、オールフィールドには一枚だけ好きなカードを使用できるという特別なシステムがあるからさ』

「好きなカードを使用できる？」

『特に強制はしない、だけどこのシステムは使ってみたいと思うけどバランスが崩れるかどうかが不安と思うカードを試したり、自分の理想のデッキに近づける。ぜひこのシステムを役立ててチャンピオンシップに向けてのレベルアップになればと思ってる。俺は今回ゲストなので、みんなが行う通常バトル、バトルフィールド、そしてDOBのバトルを見学させてもらう。今日一日、みんなの熱いバトルを期待してるぜ！』

チャンピオンの言葉と共に、また観客全員の大歓声がその場に響いた。

そして観客達はデッキを持ち、次から次へとみんなバトルの準備に入っていた。

「へえ、随分面白そうじゃないか！ぜひ俺もバトルするぜ！」

「それって、DOB？バトルフィールド？通常バトル？」

「うーん、使って見たいカードを一枚だけ加えられるってのは少し気になるな、でも俺エクスキャリバス以外に使ってみたいカードなんて……いや！」

「？」

「俺、一度だけ、使ってみたいと思ったカードがあるんだ！早速DOBで試してみるよ！」

「あつ！和人が行くなら私も行くよ！手に入れたばかりのドルクスを加えたデッキでバランスがあるかどうか不安だしね」

そう言いながら和人と咲はすぐさまその場を駆け出していく。

「チャンピオンお疲れさまでした」

「まあ知り合いの頼み、断る訳にはいかないしね」

舞台は変わり、ステージの奥で呑気にトークをしている知恵とチャンピオンの姿が……。

「まあいいじゃないですか、今のところ暇なんですよ？」

「まあな。チャンピオンともなると、安易に誰でもバトルって訳にはいかないし、変装でもしないとバトルできないぐらいだし、普段もあまりする事ないしね」

「それにしても、最近そっちはどうなんですか？」

「まあ、最近は色々面白い子を見るよ、場合によっては、俺を超えるかもほど成長するかもね」
ロードドラゴンを使うあの少年を思い浮かべながら、アラタはそう言った。

「へえ、チャンピオンが言っんですから相当な実力ですね」

「でもこっちのカードバトラー達も、結構相当な力を持ってるようだね」

「それってもしかして和人君達の事ですか？」

「まあね。エキスキヤリバス使いのあの子、いつかもう一度バトルしたいよ」

前に一度バトルした事を思い出しながら言い、その後二人は近くに
あったモニターに視界を映し、そこにはオールフィールドないでバ
トルしているプレイヤーの姿があり、その中にはDOBでバトルし
ているプレイヤーの姿も……。

『ビビッ、私ノターン。エリマキリザードLv・3、オードランLv・3、カキ CursorsLv・2ヲ召喚!』

DOBの特殊なバトルフィールド内。

ここでバトルしてるのは上級レベルのコンピューターと川村劉。

今現在コンピューターが第10ターンを迎え、お互いのライフは2。
コンピューターの場合にはネクススはなく、スピリットはこのターン
で召喚したエリマキリザード、オードラン、カキ Cursorsの三体、
一方川村の方では、ネクスス柱岩の海上都市が二枚と回復状態のス
ピリット、ライノセーラスLv・3にコアが10個乗っている状態。

『アタックステップ、エリマキリザードデアタック!』

コンピューターの攻撃宣言と共にエリマキリザードは駆け出し、川村へと向かっていく。

「その攻撃はライノセーラスでブロック!」

『無駄デス、コノターンノフルアタックデ終ワリデス』

「本当にそう言い切れる?」

そう言いながら川村は笑みを浮かべ、手札の内の一枚に手を掛ける。

「フラッシュタイミング!アームズインパクトを使用!」

・アームズインパクト『効果説明』

フラッシュ：自分のスピリットが相手のスピリットをブロックしているとき、自分のコスト4以下のスピリット1体を破壊し、そのスピリットのコストと同じ数の合計コストまで、相手のスピリットを好きなだけ破壊する。

「破壊するスピリットはブロックしているライノセーラスを指定、これによりコスト4になるまで相手スピリットを破壊する」

エリマキリザードはライノセーラスに突っ込んでいくが、そのライノセーラスが突如消滅したかと思うと、消滅したライノセーラスから青い波動が放たれ、それによりエリマキリザードは勿論、後方に居たオードラン、カキューソー共々破壊されてしまう。

「これだけじゃ終わらないよ、ライノセーラス破壊時効果発動。このスピリットの破壊時、このスピリットの上に乗っていたコア一つにつきデッキを一枚破棄。ライノセーラスに乗っていたコアは10個、よってデッキを10枚破棄！」

オードラン達を吹き飛ばした青い波動はそのまま相手へと突っ込み、相手デッキに残っていた10枚のカード全てを破棄してしまう。

『ビビッ、私ノターン……エンドデス』

「こつちもパスするから、そつちのターンに行っているよ。まあ、デッキアウトだから自動的にそつちの負けになるけどね」

そう言いながら、川村は勝利を収め、元の場所へと戻るのであった。

「俺のターン、鳳凰龍フェニックスキャノンを召喚！召喚時効果でB P4000以下のデモボーンとシキツルを破壊！」

一方別のフィールドでは同じく上級レベルのコンピューターとバトルしているリクトの姿があり、リクトはフェニックスキャノンを呼び出すと、相手スピリット二体を破壊する。

『コチラノスピリット、ゼロ』

「……氷の霸王ミブロック・バラガン、冷たき氷の刃で終了だ！」

それだけ言うと、相手に残っているラスト1つのライフ目掛けてミブロックバラガンは突っ込み、相手に向かって氷の刃を振り下ろし、最後のライフを砕く。

（氷の霸王ミブロック・バラガン、今度の大会はこいつを軸にするか）

バトル終了後、リクトは自分のデッキを持ち、その中の一枚である氷の霸王を見ながら呟く。

実はさっきのバトル、リクトは手に入れたばかりのミブロックを早速デッキに仕込み、さっきのバトルをテストとして行っていたのだ。その結果【呪撃】と低コストスピリットばかりの速攻デッキに対し、

リクトはミブロックバラガンのLv・2、3の効果でフェニックスキヤノンを召喚時効果を何度も使いまわし、見事な勝利を収め、その結果リクトは次の大会でミブロックを軸にすると決意。

（もう負けたくない、絶対に……）

ふとリクトは近くに居た川村の方を向きながら静かに思う。

『おい、リクト！』

「！？」

突然の声に急に驚き、ふと振り返るとそこには和人と咲の姿が……。

「ど、どうしたんだよ？リクト、柄にもなく怖い顔しちゃって」

「えっ、あっ……ああ、悪い、ちょっと考え事をな」

「ふん、あっ、それよりお前もここでバトルしたのか？」

「まあな」

「それで!？」

「勝ったよ、一応。こいつのおかげでな」

「!」

リクトはミブロックのカードを見せながら和人に言う。

「白の霸王（ヒーロー）×レアじゃん! すごい!」

「まあな、今度の大会はこいつを軸にする」

「へえ、もう自分のデッキ編成を決めたんだ。やっぱりすごいなりクトは」

「……和人」

「ん？」

「今度の大会で、俺は必ず勝つ。お前にも、必ず」

「リクト？」

いつになく、リクトの眼には迫力があり、なぜだか和人には少し怖

く感じた。

それでも和人も真剣な顔つきでリクトを見て……。

「俺も同じだ、絶対負けない！」

その言葉を聞くとリクトは少し笑って、「それじゃあ」と軽く挨拶を交わしその場を立ち去って行った。

「いきなりライバルが現れたね」

「ああ、でも俺は絶対負けない！だからそのための腕試しにバトル、俺達も始めるぜ！」

「そうだね。じゃあ早速」

それだけ言うと二人も前に出て、DOBのバトルに参加する。

そして二人は、初級、中級、上級の内、上級にレベルを合わせる。

『ソレデハデッキヲ機械ニ読ミ込マセテクダサイ』

コンピューターの指示に従い二人はデッキを専用の機械に差し込み、

そのデータを読み込み、データ読み込み二人はデッキを取り出す。

『ヨケレバ、ご希望ノカードヲ一枚デッキニ加エラレマスガ?』

「うん、私はいいや」

「……」

あっさり断る咲に対し、和人は……。

「俺、ジークヤマトフリードを一枚デッキに加えます!」

「えっ!?!」

突然の和人の言葉に隣に居た先は驚いた様子だった。

『ソレデハ、早速指定ノカードヲ加エマス』

「和人、どういう事!しかも加えるカードがジークヤマトフリード

って」

「別におかしくないだろ？いつか使ってみたいカードとか使用できるのがこの施設の醍醐味でもあるだろ？」

「そ、そうだけど……エクスキヤリバス一筋の和人が、いきなり他のカード使ってみたいなんて何か意外って言うか」

「俺さ、前にアフローヌって言う人とバトルして、その人が使ってたジークヤマトフリードがすごく気に入ってたんだよな」

「うん」

ふと和人の主張に、咲は興味津津に聞いている。

「でっ、その時思ったんだよ」

「うん」

「エクスキヤリバスとジークヤマトフリードを絶対に場に揃えてみたいなって……！」

”ズコッ！”

もっとすごい理由があると思っていた咲は、単純すぎる回答に思わずすっこける。

「あ、あはは……和人らしい」

「？」

「ともかく、早くバトル始めようよ」

「そうだな」

それだけ言つと早速バトルを始める咲と和人。
しかし、バトルは、簡単に勝てるほど安易な物ではなかった。

第14ターン。

コンピュータと白熱したバトルを展開している和人。

ここまで和人のライフは3、相手のライフは1。

和人の場には、疲労している暴走龍ディラノスLv・2と、回復状態のカグツチドラゴンLv・1、巨竜ギガノトンLv・2が一体ずつ、ネクサスは千識の溪谷Lv・2が一枚。

一方相手の場には、ネクサス、光の聖剣Lv・1とルナテックストライクヴルムLv・3が一体のみ。

ここまでの状況を見る限り、一見和人の方が有利に見えるが、手札消費がかなり激しく和人の手札は残りわずか2枚で、しかもデッキに加えてる龍の覇王を手札に加えられずにいた。

そして今は相手のターンで、コアは15個、手札は4枚。

『私ノターン、マジックブックヲ使用、効果ニヨリ手札ノマジックカードヲ好きナダケオープン』

相手は手札にあるマジックカードの内、インビンシブルクロークとダブルハートをオープンする。

「!？」

『マジックカードオープンニヨリ、二枚ドロ。ソシテセイバーシヤークヲルナテックニ直接合体!』

さっき引いた内の一枚にあつたセイバーシャークを呼び出し、セイバーシャークは出現と共にルナテックに合体する。

「ここで合体かよ!」

『マダデス。マジック、キラーテレスコープヲ使用、効果ニヨリ疲労状態ノスピリットヲ指定シテアタック。不足コストハ合体スピリットヲLv・2シテ用イル』

「!」

『アタックステップ、ルナテックストライクヴルムデディラノスニ指定アタック!』

「でい、ディラノスでブロック」

『ルナテックストライクヴルム、Lv・2、3【合体時】、バトル

時効果発動。ルナテックノBP以下ノギガノトンヲ手札ニ』

「ちいっ！」

ルナテックは攻撃スタンバイを始め、力強く咆哮を上げると、それによりギガノトンは吹き飛ばされ、和人の手札に戻る。

”ギヤオオオオオオオオオ——ッ！！”

合体しているルナテックストライクヴルムは飛び上がると同時に、デイラノスに高速で接近し、受け止めようとしたデイラノスを簡単に弾き飛ばし、突進を決められたデイラノスは吹っ飛ばされ、壁に激突し、そのまま消滅する。

「ぐっ、デイラノスが……」

『セイバーシャーク召喚時効果、コノターンノブロック時効果、アタック時ニ発揮。ヨッテ相手ライフヲリザーブニ』

”パリーンッ！”

「ぐあっ！」

痛みと共にライフが減り、残りライフは2つ。

第15ターン。

「さすがに……上級レベルだけあつてすごすぎる強さだよ」

少し息を切らしながらフィールドを見る和人。

次のターン、恐らく相手はオープンしてあるダブルハートとインビシブルクローク、あの二枚を使用して勝負を決めてくる筈。

それにより例え和人がどれだけブロッカーを並べようと、インビシブルクロークでルナテックはブロックされないうえに、ダブルハートを使用し、ダブルシンボルにすれば残ったライフを二つとも削られ、和人の負けが決まってしまう。

カウンターとしても和人は赤デッキ単色でアタックを強制終了させるサイレントウォールもなければ、スピリットを疲労させるバインディングゾーンもない。だから恐らく次のターンのアタックはどうしても止められない。だからこそ、和人は何とかこのターンで決着をつけなければならないのだ。

（俺の手札にはさつき戻されたギガノトンとエクスキャリバス、太陽石の神殿だけ。でもこれじゃあ勝てない……何とかこのターンで逆転するカードを……！）

スタートステップ後、コアステップを行いコアが14個、そしてこのターンの運命を分けるドローステップに……。

「行くぜ、ネクサスの効果でこのターン、ドローするカードを一枚増やす！なので二枚ドロー！」

和人は息を整え、デッキから二枚のカードをドローする。その二枚はジークヤマトフリードと双光気弾。

（どっちもバーストカード、しかもジークヤマトフリードにおいては次のターンでライフを一撃で0にされるんだから、もうバースト効果は意味が——！）

そこまで思いかけた時、和人はある事に気づく。

（待てよ！ひょっとしたら……！このターンで行ける！）

和人は鋭い眼差しでフィールドを見て、その後メインステップに入る。

「行くぜ！ネクスス、太陽石の神殿をLv・2で配置！」

フィールドを赤く照らす太陽石の神殿が和人の場に配置される。

「行くぜ！カグツチドラグーン、転召！」

カグツチドラグーンが炎に包まれ、そこに一つの影が……。

「行くぜ、炎纏いし龍の皇！剣龍皇エクスカリバスを召喚！」

その炎を振り払い、エクスカリバスは火の粉で身を輝かせながら地面に降り立つ。

”グオオオオオオオオオオ——ッ！！！”

「今日も頼むぜ、エクスカリバス！」

「和人の方、どうだろうな？」

一方、一足先にバトルを終えてフィールドから戻った咲は和人の様子に気がなる様子。
ふと隣を向けば、そこには何やら多くの人が集まっている様子で、全員和人の対戦が移っているモニターに視界を向けていた。

「和人！」

モニターを見て、今の状況を把握し、咲は真剣に和人の試合を見る。

「キースピリットが出て、ここからが本当の勝負になりそうだね」

「続けるぜ、俺はバーストセット！」

「！」

バーストをセットして、和人はアタックステップに……。

「行けっ！エクスキャリバス！！業火で全てを焼き払え！」

エクスキャリバスは翼を羽ばたかせ、和人の攻撃宣言と共に相手に突っ込んでいく。

「さらにフラッシュタイミング、双光気弾を使用！セイバーシャークを破壊！」

エクスキャリバスが突っ込んでいくと同時にマジックが発動され、それによりセイバーシャークが破壊されてしまう。

「やった！これで相手のBPは7000！和人のエクスキャリバスの方がBPが上！」

モニターを見ている咲達は、和人が再びペースを掴んだと見て、歓声を上げる。

『甘イデス。フラッシュタイミング、ディフェンシブオーラヲ使用！不足コスト、ルナテックヲLv・1ニシテ使用』

・ディフェンシブオーラ『効果説明』

このターン、ブロックしている自分のスピリット全てはBP+3000。

『コレニヨリ、ルナテックストライクヴルムBP9000』

「！」

ルナテックとエクスキャリバスは何度もぶつかり合い、炎を纏わせ、突進を決めようとするエクスキャリバスに対し、ルナテックは即座に後ろに回り込み、荷電粒子砲を放ち、エクスキャリバスに直撃させ、エクスキャリバスは大爆発を起こす。

「そ、そんな……和人のキースピリットが……」

和人のキースピリットが振り返ちにあい、言葉を失う咲達。そして和人にとっては心理的苦痛がかなり大きいはずである。

もう和人も諦めたのかと全員思い始めるが、和人の眼はまだ死んではいなかった。

「行くぜ！太陽石の神殿、Lv.2効果、【激突】を持つ自分のスピリットを再び召喚！」

和人の残りライフの内、一つがボイドに送られた後、地面に火柱が吹きあげたかと思うと、そこから再びエクスキャリバスが出現する。

『無駄デス。再召喚シヨウトルナテックハ相手ノ攻撃デ回復シマス』

「だからこいつがあるんだよ」

『?』

「自分のライフ減少時、バースト発動！」

『!?!、コチラノ攻撃デ減ッタ訳デハナイノニ』

「さっきのネクサス効果の影響さ、あれだけ手札を持ってるんだ。必ずBPアップのマジックを持ってると思って、わざと【激突】でアタック。思った通り、ディフェンシブオーラで返り討ちにしてく

れたおかげで、自分で自分のライフを減らす事が出来た！」

和人は自分のバーストに視界を向け、そのバーストは赤く光ると、表向きとなり、和人の手に収まる。

「ジークヤマトフリードのバースト効果！自分のライフが3つ以下の時、BP15000以下の相手スピリットを一体破壊、よってルナテックストライクヴルムを指定！」

ルナテックストライクヴルムの足元に炎が立ちこめ、その炎に包まれ、破壊される。

「さあ行くぜ！赤き剣を振るう霸王（ヒーロー）よ！灼熱となりて全てを切り裂け！霸王（ヒーロー）×レア、龍の霸王ジークヤマトフリード召喚！」

天に雷雲が現れ、その雷雲に穴があき、そこから龍が舞い降り、炎を纏いし剣を握り、雷鳴を背に力強い唸りを上げる。

”ガアアアアアアアア——ッ！”

「ううっ！ジークヤマトフリード、エクスカリバス！夢に見た念願の共演だぜ！」

エクスカリバスとジークヤマトフリード。二体の龍は力強い咆哮を上げ、その咆哮はフィールド中に響き、その音圧によりフィールド中が揺れる。

「アタックスステップ！フルアタックで終わりだ！」

攻撃宣言と共に、二体の龍は飛び立ち、残り一つのライフ目掛けてエクスカリバスとジークヤマトフリードは真っ直ぐ相手へと向かっていく。

『ライフデ受ケマス』

エクスカリバスの炎とジークヤマトフリードの剣が同時に炸裂し、残り一つのライフが砕け、和人の勝利となる。

「ふう……」

バトルを終え、一息整えながら元の場所に戻ってきた和人。
するとまもなく、試合を見ていた観客達全員和人に向けて歓声を上げる。

「うおっ！？何だ！？」

「和人っ！」

「ん？咲か？」

振り返ればそこには咲が……。

「見たか見たか！俺の鮮やかなバトルで見事勝利だぜ！」

「うん、見てたよ。エクスキャリバスとジークヤマトフリード。和人の念願通りフィールドに揃ってたね」

「ああ、それよりお前の方はどうだったんだ？」

「まあ一応ね」

軽く苦笑いしながら答える。

「みんなおめでとう！」

「「？」」

突然の声、振り向くとそこにはチャンピオンと知恵の姿が……。

「「知恵さん！？」」

「やあ咲ちゃんに和人君、さっきの試合見てたよ。とってもすごか

ったね」

「それはそうと、知恵さんが何でここに？」

「ああ、私、バトスピショップとこのオールフィールドを受け持つ
てるから」

「「ええ！？」」

和人の質問に答える知恵。その返答に明らかに咲と和人は動揺して
いた。

「それより、和人君、君のバトル。チャンピオンも見てたよ！」

「！」

和人はそう言われると知恵の隣に居るチャンピオンに視界を向ける。

「すごくいいバトルだった。まさか自分で自分のライフを減らして
バースト発動させるなんて俺も予想外だったぜ」

「はい！ありがとうございます！！」

和人はチャンピオンに褒められ、とてもうれしそうだった。

「あの時と比べて随分成長したみたいだね」

「あの時？どこかで会いましたっけ？」

「えっ！？あっ！いや、その……わ、悪い！今は忘れてくれ」

思わずアフロノの正体をばらしてしまいそうになったアラタは苦笑いをしながら、何とか話をそらそうとする。

「えーと、それはそうと……みんなに伝えなきゃいけない事があるな」

それだけ言うと、知恵から手渡されたマイクを手に取り、カードバトラー達がいる中央に行く。

「カードバトラーのみんな！熱いバトルを見せてもらった！！実に俺も感動した。いつかみんなともバトルしたいと俺は思ってる。でもその前に、もうすぐ開催されるチャンピオンシップ、みんな必ず勝ちぬけよ！」

「「おおーっ！」」

カードバトラー達は大きな声でアラタの言葉に返事をし、その後力ードバトラー達は日が暮れるまでもっとバトルを楽しんでいくのであった……。

第7話『オールフィールド突入！ 龍の霸王咆哮』（後書き）

いかがでしたか？第7話！

今回は総文字数10000越えの、文章となっていました（苦笑）

和人「長文の割には相変わらずの小説だけだな」

作者「うるせえよ」

和人「まあともかく、今後も早く小説書くことだな！」

作者「他人事だと思いやがって。ともかく次回のタイトルコール誰かよろしく」

和人「お前やれよ！ったく……次回『チャンピオンシップ開幕！

虚神降臨』」

作者「次回もよろしくね！！」

第8話『チャンピオンシップ開幕 虚神降臨!』（前書き）

始まりました!第8話!

今回はいよいよ和人達が初めて大会参加!

そして今回の話は、和人にエクスキャリバスに次ぐ新しい仲間が現れる話です!

さらにそれだけでなく、いよいよ物語の紹介に書いてあった『ある事件』、それがついに動き出します!

今回も最後までぜひ見ていただければ嬉しい限りです。
早速本編をどうぞ!

第8話『チャンピオンシップ開幕 虚神降臨!』

時計がまだ午前8:00を指すこの時間。

前に遭ったオールフィールドのようにそこにはカードバトラーの行列が……。

勿論彼等がそこにいるのには理由がある。

その理由は今日がチャンピオンシップ、いや霸王（ヒーロー）チャンピオンシップが開幕する日でもあるからだ。そして今か今かと大会が始まるその瞬間を待つカードバトラー達。その中には、咲やリクト、川村の姿もある。

だが、なぜかその中に和人の姿だけは見えず……。

「もう何やってんだろ？和人。あいつが遅れるなんて珍しいけど」

「まあ大会が大会だからな。準備で手間取っていたなんて理由だろ？」

先に並んでいるリクトと咲は、そんな事を言いながら和人が来るの

を待っている様子。

『うおおおおー！遅刻だ！遅刻！！！』

和人の方では、まだ会場に少し離れた場所で、全力疾走を続け、会場へと足を急がしていた。

リクト達が言っていたように、彼が遅れた理由は大会用のデッキ作りに時間をかけすぎた事が原因だった。

全力疾走を続ける和人。そしてその甲斐あってか、ようやく会場が見え始め、ラストスパートを掛け、何とか息を切らしながらも会場に辿り着く。

「ゼエ……ゼエ……よう、やく到着」

「遅いよ和人！」

「まあ時間はギリギリだな」

和人が来たのを見ると、リクトと咲は和人に言う。

「悪い悪い、デッキ作りに夢中になってて」

その言葉を聞いた途端「やっぱり」と言った様子で、ため息をつく。

「?、どうしたんだ二人とも?」

「何でも」

”ジリリリリッ!”

しばらくして、ベルが響き、それと同時にドアが開くと全員会場の
中へ。

そして全員前へと進んでいき、参加登録の手続きを済ましていく。

『はい！若槻和人さん、木野咲さん、来道リクトさん、参加承認い
たしました』

三人も参加手続きを終え、会場へと進んでいく。

「感激だぜ！！初めてのチャンピオンシップ！！」

「そうか、お前らって確かコレで初めてか」

一度チャンピオンシップを経験済みのリクトはふと辺りを見回しな
がら二人に……。

「大会が開幕されるまでまだ時間がある。その間、他のカードバト
ラーとフリーバトルしたり、トレードしたりすんのもありだぜ？そ
れに、物販コーナーもあるしな」

後ろにある物販コーナーを示しながらリクトは言い、それに和人は何かに気づいた様子で……。

「ああーッ！俺そついや最新弾まだ購入してなかった！！！」
すると和人はすぐさま行動に移し、逸早く物販コーナーへと足を急がせる。

「まったくせつかちな奴」

「あの、リクト君。リクト君は最新弾購入したの？」

「ん？俺はいい、下手にカードを組み込んだりすれば大会用のデッキが崩れるしな、お前は購入しなくていいのか？」

「うーん、まあ私も購入してくる。じゃあね！」

それだけ言つと咲も和人の後を追つて、一時リクトから離れる。

「さて、俺もそろそろ準備をしないとな」

それだけ言っと、リクトは自分のデッキを握りしめながらその場を立ち去っていく。

「うーん」

和人は最新弾霸王編第2弾を購入し、それによって手に入れたカードを見ながら考え込んでいた。

「極龍帝カストロフロドラゴン……こいつをどうするかだな」

Mレアカードであるカストロフロフを手に入れ、デッキに入れるか否かを考え込む和人。

「どう？いいカード手に入った？」

「あつ！知恵さん！？何でここに？」

「まあ色々ね。ここの物販コーナーを任されてるから」

「へえ、そうなんだ」

「それより、そっちは何か大会に使えそうなカード手に入っただの？」

「手に入ったカードはこんな感じですよ」

「カタストロフドラゴン。コストは重いけれど、超強力なカードだね」
知恵はそれを見て、興味深そうに和人を見る。

「で？どうするの？それをデッキに入れる？」

「そうですね」

ふとデッキを取り出そうと、懷に手を入れるが、何か違和感を感じる。

「？、何だコレ？」

違和感を感じ、それを懷から取り出すと、それは第6弾のパックだった。

「おゝい、和人ゝゝ！」

「おお！咲！！！」

そんな時、咲も和人の元へ駆け寄ってくる。

「おはよう、咲ちゃん」

「あつ！店長、おはようございます！！どうしてここに？」

「まあ色々ね。それより早速パックを買った様子ね」

「ええ！それに最新弾のカードだけじゃなく、この大会のためのカードも手に入ってますから！」

「風の霸王ドルクス、緑使いの咲ちゃんには強力な一枚ね」

「はい！和人もパック買ったんでしょ？何かいいの手に入った？」

ふと和人の方を覗きこみ、和人が持っている第6弾のカードが視界に入る。

「あれ？最新弾買わなかったの？」

「いや、買ったよ！こつちが最新弾で当たったカード。でもさ、前に第6弾買った時、開封せずに仕舞ってただろ？それを今日の今日まで忘れてたんだ」

「！、もう、ちゃんと開封しなきゃだめでしょ。パックに入ってるカードが泣くよ？」

「ついすっかりしてて。でも早速開封するぜ！」

そんな事を言いながら早速そのパックを開封し、中にある8枚のカードを見る。

「！、これって！？」

その中の一枚はXレアである激神皇カタストロフドラゴンのカードが……！

「うおおッ！Xレア来たぁー！ーッ！！」

「！、それってBP2万の最強クラススピリットじゃない！」

「カタストロフはこれで二枚目だな」

「？、どういう事？」

「ほら、最新弾でも当たってんだろ？カタストロフ」

「！、新旧のカタストロフが揃ったって事！？」

「まあな、こいつには運命を感じるぜ」

「で？どっちのカタストロフを入れるの？」

「問題はそれなんだよな」

二体のカタストロフを見比べながら考え込む和人。

「はい！二人とも、そろそろ大会も開始するし、出場者はあちらにね」

「はい！」

「うーん、決めた！俺デッキにはコイツを入れる！そうときまったら早速行cule、咲！」

「あつ！うん！！」

和人はデッキに一体のカタストロフを入れ、咲の手を掴み、急いで試合場へと急ぐ。

『みんな！ようこそ霸王（ヒーロー）チャンピオンシップへ！セクシー？』

「ノー！ギャラクシー！！」

大会司会者であるお馴染ギャラクシー、彼の合言葉に全員大きな声で答える。

「ええ、今日は何千者参加者がこの大会に参加してくれている。強者揃いのカードバトラーの中から誰が霸王（ヒーロー）となるのか！楽しみで溜まらない！本大会で勝ち残った三名が世界大会へと進む事が出来る！みんな頑張ってくれよ！」

「霸王となるのは俺だぜー！ーッ！」

「興奮しすぎ！」

和人の様子を見て少し呆れた様子の咲。

『さて本大会のルールを説明しよう。今大会は特別ルールでのガンスリガー！8連勝するまで戦い続け、一度でも負けたらそこで敗退。ルールはそれだけ。みんな詳しく分かったかな？』

「「おおー！ーッ！」」

『それでは早速！ゲートオープン！解放！！』

「サイゴードゴレム、オリハルコンゴレムをLv・2に、リブラゴレムをLv・3に」

「!!!」

「アタックステップ、三体でフルアタック【大粉碎】、【粉碎】でデッキアウトだね」

「参りました」

一番先に8勝目を決めたのは川村劉。彼は今回サイゴードゴレムを手に入れ、よりデッキ破壊が協力となり、戦った対戦相手は全員デッキアウトで負かされていた。

「（奴も予選突破。俺も勝ち抜けないとな）氷の霸王ミブロックバ
ラガンでアタック！フラッシュタイミングでホワイトポーション、
回復させて再度アタックだ」

「ライフで！」

一度目、二度目の攻撃でライフが0となり、リクトも8勝目を終えて予選突破。

「風の霸王ドルクスウシワカでアタック！」

「ライフ！」

咲の方でも、ライフが0となり8勝目を決め、喜びに浸る。

「やっぱ最高！風の霸王！！本戦でも勝ち抜くよー！！」

川村、リクト、咲が勝ち抜いてる中、和人の方では……。

「デイルノスでアタック！これでようやく7勝目」

まだ7勝目を終えたばかりで、今ようやく8戦目を迎える。

「よろしく！」

「ふん、この試合さっさとリタイアでもしたら？負けるのが落ちだよ？」

「？」

「俺のデッキにかかればあっという間に終わりさ」

「！、随分自信があるようだけど、勝つのは俺だ！」

お互い専用のテーブルにデッキを置き、試合を始めていく。

「行くぜ俺のターン！ディメトロドロンを転召でエクスカリバスを召喚！」

第10ターン。和人の場にはアポロディノスLv.2、デイメトロ
ドロンLv.1、ネクサス、焰龍の城塞都市、太陽石の神殿が一枚
でライフは残り3。そして相手の場には力キューソーLv.2が二
体とキングゴラドンLv.3が一体で、ライフは4。そして今は和
人のターンでデイメトロドロンをトラッシュに移動させて、エクス
キャリバスを召喚する。

「召喚時効果で力キューソーを破壊！そしてバーストをセットして、
アタックステップ！アポロディノスでアタック！」

「ライフで受けてバーストを発動！」

ライフを一個リザーブに置き、その後裏向きにセットしていたバーストカードをオープンする。

「！？」

「ジークヤマトフリードのバースト効果でエクスキャリバスを破壊
！！」

「ぐうっ！俺の相棒が……！」

エクスキャリバスをトラッシュに置き、そしてその代わりに相手の
場にジークヤマトフリードが出現する。

「へっへ、俺のジークヤマトフリード。こいつが場に居れば俺は無敵。さっさと終わらせてやるぜ！」

「……こいつが場に居れば無敵。まるでジークヤマトフリードに頼り切ってるような言い方だな」

「だってそうだろ？今場に居るカキューソ達なんかおまけにすぎない。ジークヤマトフリードさえいれば、バトルに勝てる」

「……ジークヤマトフリードに頼り切ったプレイング。悲しいな、お前」

「！、何だと！？お前だって一緒だろ？」

「エクスキヤリバスも確かに大切だけど、他のカードだって俺には大切！デッキに入ってるデイラノスや、ジークフリード、他のカードだってみんな俺の仲間だ！」

「けっ！エクスキヤリバス破壊された奴が威張るな！」

「絶対この戦いでお前を負かしてやる！俺はターンエンド」

「ふん！やれるならやってみやがれ！このターンで終わらせてやるよ！メインステップ！キングゴラドンをLv・1に、そしてゴラドンを召喚してジークヤマトフリードをLv・2に！アタックステップ！」

「来るか！」

「……（このターン、バーストカードはないし、無理に指定アタックせず一気にライフをたたくか）ジークヤマトフリードでアタック！フラッシュタイミングでストームアタックを使用！アポロディノスを疲労させて、ジークヤマトフリードを回復！」

「くそっ！」

「メインのアタックだ！」

「ライフで受ける。でもライフ減少時でバースト発動！」

「！？」

「霸王爆炎撃！BP4000以下のスピリットを3体破壊！よってキングゴラドン、カキュソー、ゴラドンの三体を破壊！」

三枚のスピリットをトラッシュに送り、相手の場にはジークヤマトフリードだけが……。

「くそっ、でもまあジークさえ残ってれば勝ちは見えてる。ターンエンド」

「俺のターン。コアシテップ！ドローステップ！」

コアシテップ後、和人はデッキから一枚めくり、そのカードを見る。

「……お前に会いたかったぜ」

それだけ言つと和人はリフレッシュステップを行つてアポロディノスを回復させ、メインステップへ。

「行くぜ！アポロディノスの効果で虚神の系統を持つスピリットをコスト6に！そしてコスト2を支払って激神皇カタストロフドラゴンを召喚！」

「！」

「召喚時効果で１ドロー」

残り手札二枚のカードを見て和人は笑みを浮かべる。

「カタストロフドラゴン、アポロディノスをレベル２に！アタックステップ！アポロディノスでアタック！」

「ライフ！」

アタックによってライフをリザーブに移し、残りライフ２。

「行くぜ！激神皇カタストロフドラゴンでアタック！【激突】発動！」

「ふん、相打ち狙いかよ？」

「いいや、フラッシュタイミングでスピリットリンク！さらにフラッシュタイミングでグレートリンクを使用！」

「！」

和人が使った二枚のマジック。

まずスピリットリンクの効果はスピリット一体に【覚醒】を与え、続くマジック、グレートリンクの効果でトラッシュのコア全て、つまりトラッシュにあるカタストロフの召喚で使った2コアと、このマジック二枚で使った3コアをカタストロフの上に置き、自動的にLv・3にアップ。

「これでカタストロフはBP20000!」

「!?!」

ジークヤマトフリードが破壊され、アポロディノスのLv・2、3の効果が発動。これにより自分のアタックステップで自分の【激突】を持つスピリットのバトル勝利時、このスピリットは回復。

「回復!?!って事は!?!」

「そっちの残りライフは2。だからカタストロフとのフルアタックで勝利だ」

「……俺の負けです」

「うつしやあ！8勝目決めたぜー！ッ！」

「そんな〜、俺が負けるなんて」

『当然の結果ですね』

「「！？」」

突然の声、ふと振り向いた先には清楚でお淑やかなお嬢様のような女の子がそこに居た。

「え〜と、あんたは？」

「初めまして。若槻和人さん、でしたよね？私、相崎光と申します。以後お見知りおきを」

「ど、どうも」

「用があるのは実はその男でして」

「？」

和人は対戦相手の男性を見て、不思議に思う。

「俺に、何か？」

「あなたにお渡ししましたジークヤマトフリード。返却させてもらいます」

「そ、そんな！？俺にくれたんじゃない？」

「私は一言もあなたに差し上げると言っていないません。それに間違っても、他のスピリットを大切にせず、ジークヤマトフリードだけに頼り切った三流カードバトラーには差し上げません」

「！」

それだけ言つと光と言う女性は男のデッキからジークヤマトフリードを没収する。

「あの〜」

「お恥ずかしいところを見せてしまいましたね。実はこれから対戦相手となるかもしれないあなたの実力をどうしても見てみたくて」

「はあ……」

「それでこの男にジークヤマトフリードをお貸したんですが、どうやら渡す相手を間違えてしまったみたいで」

「……」

「でもあなたはあの男とは違う。さっきのあなたの様子を見ててそう実感させてもらいました」

「あなたも大会出場者なんですか？」

「ええ、私も8勝して。本戦で戦う時はぜひよろしくお願いしますね」

「は、はい！」

「あなたのエクスカリバス。それに今回あなたのデッキに加わったカタストロフ、ぜひバトルフィールドで出会いたいです」

「ま、まあともかくお互い勝ち抜きましょう！」

「ええ、あなたと戦うの楽しみになってまいりました。それでは」

光はその場から立ち去り、別の場所へ移動していく。

「和人……！」

「おお！咲！」

光と別れた直後、入れ違いに咲が和人の元へ。

「ようやく8勝目決めたみたいだね」

「お前等と比べたら遅くなっただけだな」

「はは、それよりさっきの試合見てたよ？結局、激神皇をデッキに入れたんだね」

「ああ、エクスカリバスと同じくやっぱこいつにビビッって感じてさー！」

デッキの内の一枚、カタストロフを取り出し、そのカードを眺める。

「今度は広々とした場所で、バトルフィールドでお前に会いたいぜ！」

カタストロフに向けて言った後、またデッキに仕舞う。

「予選を勝ち抜けたメンバーも決まったらしいし、本戦からいよいよバトルフィールドでのバトルだね」

「ああ！本戦も勝ち抜けて！世界大会へ向かっていくぜー！ッ！」

そう決意しながら意気込みを叫ぶ和人だった。

「どうだった？ダイキ、ガンスリンガーの様子は？」

「ふん、結果は雑魚ばかり。見るよ、現にこいつだって不服な様子だ？」

ダイキと呼ばれた男は懷から、フードで身を包んだ男にカード名、コスト、そしてLv・1以外何の記述も書かれていないあるカードを取り出す。

「次からは本戦だ。精々そいつを目覚めさせるカードバトラーと出会う事だ」

「アンタの方も、この紫だけじゃなく、あと5人のカードバトラーに特別なカードを渡さなきゃならないんだろ？」

「既に次の目星は付いている」

すると男はダイキが持っているカードと同じ、記述のない白のカードを取り出す。

「見ている。これからだ」

それだけ言つと男たちはその場から立ち去つて行つた。

第8話『チャンピオンシップ開幕 虚神降臨!』（後書き）

いかがでしたか!?

ついにチャンピオンシップに出場した和人達!

そして見事無事新たな仲間カラストロフドラゴンを使って予選突破!
今回はテーブルでのバトルでしたが、今度バトルフィールドでカラストロフが登場する際、和人の新しい召喚パフォーマンスを書こう
と思つてます（笑）

そして今回の本編最後にある男達の不穏な動きを……。

平和にバトルを楽しむ和人達。だが次第にそんな平和が!

これからもこの小説をぜひよろしくお願いします!

新キャラ紹介

・相崎光（アイザキ ヒカリ）

15歳の少女。由緒正しき家柄で真正正銘のお嬢様。

藍色の髪が特徴的で、特に威張った態度も見せずお淑やか。

黄色デッキの使い手で最近和人達の町に引っ越したとか……。

・城島ダイキ（ジョウジマ ダイキ）

紫色の髪が特徴的な15歳の少年。

紫デッキの使い手でコア外しや【呪撃】、【不死】など紫らしい戦い方を得意とする。

バトスピ以外にもタロットカードを嗜んで、時にタロットで状況を読む。

そして彼はある特殊なカードを持ち、秘密があるらしいが……。

第9話『風の霸王vs魔帝龍騎』（前書き）

どうも皆様、こんばんわブラストです。

昨日のクリスマス、皆様はどのようにお過ごしでしょうか？
きっと皆様楽しいクリスマスを過ごしたと思います。

そしてクリスマスが終わり、もうすぐ年明け！

今年最後の更新になると思う第9話、ぜひ見ていただければ嬉しい限りです。

今回の話は普段バトルシーンを書いてなかった咲がメインの話！
手に入れたばかりの風の霸王とタイトルで分かると思われるあの龍
が激突！

ぜひ見ていただければ嬉しい限りです！

第9話『風の霸王vs魔帝龍騎』

『みんな！まずは予選突破おめでとう！』

勝ち上がったカードバトラー達を祝うギャラクシー。予選通過者は総勢は32名。カードバトラー全員予選突破だけあって、実力者と言うのは見るだけで分かる。

『勝ち上がった三名だけが世界大会へ進出！だれが勝ち残るのか、楽しみでたまらない！そして早速一回戦のカードをシャッフルだ！』

和人達はモニターを見て、自分達が戦う相手を見る。

『本戦からはバトルフィールドでのバトル！みんなぜひ頑張ってくれ！！それでは、セクシー？』

「「「NO！ギャラクシー！！」」」

全員声を揃えていい、にぎやかな声が会場中に響く。

そして本戦が始まるまでの間、少し休憩と言った様子でベンチに座る和人と咲。

「いよいよ本戦か」

「そうだね。にしてもよかったよ」

「ん？」

咲の言葉を聞いて、和人は不思議に思う。

「だって、初戦でいきなり和人やリクト君、それに勝ち抜け候補の川村君とは当たりたくないじゃん？」

「俺は別に誰でもいいぜ？最高のバトルが出来るならな」

「はは、相変わらずだね」

「じゃあ、俺は最終デツキ調整に入るから、お前もしといた方がいいぜ？」

それだけ言ったあと、和人はその場を立ち去る。

「さて、私も頑張らないと」

『hey、ちよつといいかな?』

移動しようとした矢先、突然声を掛けられ、振り向いた先には少し派手な服装の男が……。

「あの〜何か?」

「俺の名は樋田英（ヒダエイ）、君の対戦相手だよ」

「ああ、宜しくお願いします」

「こちらこそ、それよりさっきの、確か和人だっけ?彼と付き合ってるの?」

「!?!」

その言葉を聞いた途端、咲の顔は赤くなる。

「なになに言ってるんですか!そんな訳ないじゃないですか!」

「はは、それは良かった」

笑いながら言い、そして英は……。

「もしさ、次の試合で俺が勝ったら、付き合ってくれないかな？」

「……はい？」

英の発言は咲にとって、とても理解しがたいものだった。

「あの、何言って？」

「だって君かわいいしね、いわゆる一目惚れって奴、まあ、嫌なら嫌でいいよ。勝つのは俺だし」

少し挑発的な英の言葉に咲は少し”カチーン”ときた様子で……。

「勝つのは私です！絶対に負けませんから」

「じゃあ、俺の条件飲んでくれる？」

「構いません。勝つのは私ですから！」

「OK、じゃあ試合、楽しみにしてるよ」

笑いながら言っと、英はその場から立ち去る。

「（あんな挑発で引つ掛かるなんて楽勝♪、まっ、それはそれで可愛いけどな）」

そんな事を言いながら、英は笑みを浮かべる。

「はあゝゝ、あんな事、言わなきゃよかった」

咲の方ではあんな挑発に乗ってしまう自分の性格と発言を恨みながら、暗い様子だった。

「どうしたんだよ、咲？暗い顔しやがって」

デッキ調整を終え、戻ってきた和人は咲の様子を見ながら言う。

「実は……」

咲は和人に全ての事情を離す。

「ふゝゝん、そんな事がね」

「『ふゝゝん』って、他人事みたいに言わないでよ」

「だって他人事じゃん？」

「少しぐらい相談に乗ってくれたっていいじゃない！」

「別に勝てばいいだけの話だろ？」

「そんな簡単に言わないでよ。私、まだ実力は不十分なんだよ」

「んな訳ないだろ、お前だって予選通過者の一人何だぜ？」

「……………」

「それにドルクスって言う相棒も手に入れてんだろ？ 咲なら必ず勝てるさ」

「…………何でだろう、和人に言われると自信が出てくるよ」
悩むのがばからしくなってきた咲は笑いながら言う。

「ありがとね、お陰で何か自信が湧いてきた」

「！」

咲の笑みを見て、和人の頬は少し赤く染まる。

「べ、別に！ 俺は当たり前の事言っただけだし！！ それよりさっさとバトル行けぜ！」

「う、うん…………でも何でそんなに赤くなってんの？」

「別に赤くなつてねえよ！」

そんなやり取りをしながら二人はその場を後にし、試合の方では続々と勝者と敗者が決まってい

「機動要塞キャッスルゴレム召喚！」

予選通過者の一人、川村劉は手札からキャッスルゴレムを召喚すると、地面に輝が入り、地面を突き破りながら、雷鳴と共にキャッスルゴレムが出現する。

「召喚時効果発動。自分のネクサス一枚に5枚。場にあるネクサスは3枚、よって15枚破棄」

”グオオオオオオオオオ——ッ！”

キャッスルゴレムは唸りを上げ、手に持っている槍を両手で握りしめ、勢い良く地面に叩きつけ、そこから青い波動が噴き出し、波動

は衝撃波となってプレイヤーを襲い、青い波動は残る相手デッキ全
てを吹き飛ばし、デッキアウトにさせる。

「ターンエンド」

「嘘、初戦敗退かよ!!?」

一回戦突破したものの、川村は少しつまらなさそうにため息をつく。

デッキアウトで勝負を決め、戻ってきた川村に観客達は歓声を上げる。

そして続く試合でも、リクトはストライク、和人はエキスカリバスで勝負を決め、一回戦突破し、そして一回戦最後の試合。

「咲頑張れよ!」

「うん」

応援してくれている和人に笑みを浮かべながら言い、対戦者と共に
台座に。

『さあ一回戦最後の試合！両者ぜひ熱い試合を見せてくれ！』

「へえ、リタイアしなかったんだ」

「当たり前です。絶対に勝ちますから！」

「ふうん、でもまあ、いい試合を楽しみにしてるよ」

『それでは行くぞ！ゲートオープン！』

「「開放！！」」

その言葉と共に二人はバトルフィールドに。

—— 第1ターン。

「俺から先行、スタートステップ！ドローステップ！」

5枚に増えた手札を見ながら、英はメインステップへ。

「リザドエッジを二体召喚！どちらもLv・2」

手札からリザドエッジ二体を呼び出し、どちらにもコア2個を置いた後、赤いルビーが砕け、二体のリザドエッジが出現する。

「これでターンエンド」

—— 第2ターン。

咲はスタートステップ後、コア、ドローステップを行いコア、手札共に5つとなる。

「メインステップ！デイオマンティス召喚！」

エメラルドが出現と共に砕け、そこからカマキリの姿をしたスピリット、デイオマンティスが出現する。

「ネクサス、賢者の樹の実を配置！そしてバーストセット！」
再びエメラルドが出現と共に砕け散り、咲の後ろに木のようなネクサス、賢者の樹の実が配置され、その後バーストをセットし、咲はターンエンド。

—— 第3ターン。

「へえ、バーストね。なら俺もやろっかな？」

「？」

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！」
英のコアは5つに、手札は4枚に増える。

「メインステップ！バーストセット」

「！」

英が設置したバーストに警戒する和人。

「さらに二体のリザドエッジをレベルダウンさせ、カグツチドラグ
ーン召喚！」

一回り大きいルビーが砕け、鳴き声を上げながら出現するカグツチ
ドラグーン。

「アタックステップ！行け、カグツチドラグーン」

英の攻撃宣言と共にカグツチドラグーンは翼を羽ばたかせながら咲
へと向かっていき、そしてカグツチドラグーンの眼は赤く光ると、
英のデッキから一枚カードが浮かぶ。

「こいつのアタックで、俺は1ドロ。そしてメインアタック！」

「ライフで受ける！」

カグヅチドラグーンは切り裂くように翼を叩きつけ、展開されたバリアに直撃し、ライフが砕かれ、痛みと衝撃が咲を襲う。

「うッ！」

「はは、悪いね、君がリタイアしてくれたら、痛い思いさせないで済むんだけど？」

「いつまでもその余裕が続きますか？」

「？」

「ネクサスの効果、ライフが減った時ボイドからコアを一つリザーブに」

賢者の樹の実から木の実ではなく、コアが落ち、そしてリザーブに1コア増える。

「さらにライフ減少時でバースト発動！グラントベンケイ！」

バーストが発動し、裏向きにされていたグラントベンケイがオープンする。

「！」

「効果で手札を一枚破棄！」

「しゃあねえ、こいつにするよ」

効果に従い英は自分の手札から、「フレイムサイクロン」を破棄し、その後ベンケイは手札に。

「ターンエンド、中々やるね」

「こんなもんじゃないですよ、勝つ気でいますから」

「やってるな」

「リクト!？」

咲の試合を見ていた和人の前に、リクトの姿が……。

「よお、そっちは勝ち上がったのか？」

「当然!こいつがいれば大丈夫さ！」

和人はエキスキヤリバスのカードを翳しながら言う。

「精々お前と戦うの楽しみにしてる」

「俺もだ！」

「それより、咲の方も気になるな」

「そつだな」

そんな事を言いながら二人は咲の試合に集中する。

第4ターン。

咲はスタートステップ後、コア、ドローステップを行い、コアは8個、手札は4枚となる。
そして続くメインステップ……。

「ブラックマツハジィ召喚！さらにマジック、スピードスターを使用！」

・スピードスター効果説明。
このターン、自分のスピリットが相手のライフを減らした時、コア二個をリザーブに置く。

「コアブースト、だな？」

「デイオマンティスをLv・2にしてアタックステップ！ブラックマッハジィでアタック！」

「ライフで受けるよ」

ブラックマッハジィは一気に英へと突っ込み、そのまま展開されたバリアに突進し、ライフを砕く。

「痛つてえ、結構やつてくれるな」

ライフが減り、その痛みと衝撃で後ろに後退させられる。
残りライフ5↓4。

「これでターンエンド」

——第5ターン。

「スタートステップ！コアステップ、ドローステップ！」
コアは7個、手札は3枚。

「メインステップ！マジック、双翼乱舞使用！デッキから二枚ドロ
ー」

二枚のカードをデッキに加え、笑みを浮かべる。

「カグツチドラゲーンをレベル2にアップ！」
コアが二個追加され、レベルアップと共にカグツチドラゲーンは鳴
き声を上げる。

「アタックステップ！カグツチドラゲーンでアタック！一枚ドロ
ー＋【激突】、ディオマンティスに強制ブロックさせるよ」

「フラッシュタイミング！ムシヤメガを召喚！！」

「！、【神速】か」

・【神速】効果説明。

このスピリットは手札からフラッシュのタイミングで召喚できる。
このときスピリットに置くコアとコストは、すべてリザーブから支払われなくてはならない。

「だからこそ、さつきスピードスターを使った訳ね？」

「はい、さらにムシャメガの召喚時効果でディオマンティスのBPを+1000します」

ムシャメガの出現とともにディオマンティスは力強く両腕の鎌を振り上げる。

「その召喚時効果でバースト発動！双翼乱舞！」

「！」

「デッキから二枚ドロ、そしてカグツチドラグーンのアタックは続く！」

「ディオマンティスでブロック！」

ムシャメガの効果でBPが6000に増え、カグツチドラグーン
のBPと並ぶ。

そしてカグツチドラグーンの翼とディオマンティスの鎌が互いに切り結び、”ガキイン”という音と共に二体は消滅。

「仕方ないな、ターンエンド」

第6ターン。

咲のターンとなり、メインステップまでの準備を進め、コアは11個、手札は二枚に。

「メインステップ！バーストをセット！」

「バーストカード、それはまたベンケイと見ていいのかな？」

「どうでしょうね？、続けますよ、マジック！ハンドリバースを使

用」

「！」

「この効果で相手の手札と同じ枚数になるだけドロー！」

「あのマジック、確か」

モニターでその様子を見ていたリクトは、前にリクトとのバトル時、川村もこのマジックを使用していた事を思い出す。

「咲もドルクスだけじゃなく、デッキ全てが強化されてるな」

「ふん、まあそれだけあいつも実力者ってことだな」
モニターを見ながらリクトは言う。

咲の方では、英と同じ枚数になるだけ、つまり手札0から8枚へと一気に増える。

「さらにディオマンティスをレベル2で召喚！さらにバーストを破棄してバーストをセット！」

グラントベンケイを破棄し、咲は新たなバーストカードをセット。

「！」

「さらにニコア追加でブラックマツハジをレベル2に、アタックステップ！ブラックマツハジでアタック！」

「ライフで受ける！」

ブラックマツハジは再び英へと突っ込み、ライフを砕く。

「があっ！」

「続けてディオマンティスでアタック！」

「くそっ、これもライフで受けるよ」

続けてディオマンティスが突っ込み、展開されたバリアをディオマンティスの振り下ろした鎌で切り裂き、またライフを砕く。

「ぐわっ！！さすがに、二体のアタックは効くぜ……」
ライフ4↓2。

「ターンエンド」

—— 第7ターン。

「へへ、結構やるけど、このターンで終わらせてもらっぜ」

英はスタートステップ、コアステップ、ドローステップを行い、コアは10個、手札は9枚に。

「そろそろ、俺の彼女になる覚悟、しといたら？」

「それってどういう？」

「こういう事、メインステップ！雷と共に来たりし魔王、全てを壊す破壊者となれ！魔帝龍騎ダーククリムゾン、レベル2で召喚！！」

「！」

より大きいルビーが出現し、それが砕け散ると共に空は黒雲となり、その雲から光が差し込み、そこからダーククリムゾンが舞い降り、咆哮を上げる。

「召喚時効果、デッキから7枚オープンし、その中に系統龍帝、龍騎を持つカード全てをノーコストで召喚」

オープンされた7枚の中の一枚に魔龍帝ジークフリードのカードが……！

「！？」

「ビンゴ♪ダーククリムゾン、お前の力で黒き龍を眠りから目覚めさせ、この場に出現させる！」

”ギヤオオオオオオオオオ——ッ！”

ダーククリムゾンの叫びによって空にある黒雲は雷雲へと変わり、雷雲とダーククリムゾンの咆哮が共鳴したかと思うと、地面が揺れ、そこには魔龍帝ジークフリードの姿が……。

「不足コストはリザドエッジー体から確保」

ジークフリードの維持コストをリザドエッジーから確保したため、二体の内の一体は破壊。

「二体の龍を、一気に……」

「こいつが俺の最強カード！」

英はダーククリムゾンの姿を見て、笑みを浮かべながら言う。

「さて、手札はこんなにあるけど、もう使用することはないな。だってこれで終いだし！アタックステップ！」

「！」

「ダーククリムゾン、行きなッ！」

ダーククリムゾンはアタック宣言と共に眼を赤く輝かせる。

「アタック時効果発動、龍帝を持つスピリット1体につき、BP5000以下のスピリット1体を破壊する。今俺の場には魔龍帝と魔帝龍騎、よってムシャメガとディオマンティスを指定だ」

ジークフリードとダーククリムゾンは咆哮を上げ、二体の龍は火球をムシャメガとディオマンティスに飛ばし、直撃した二体は爆発を起こしながら破壊される。

「そしてメインアタック、一気に決めるぜ！」

ダーククリムゾンは空高く飛び上がりながら、手にしている槍のよ
うな物を咲に向かって勢い良く投げつけ、その槍はまるで雷を纏っ
ているかのように”バチバチッ”と電気が走り、それは咲へと襲い
かかる。

「決めるのはこっちだよ」

「えっ？」

「相手によるスピリット破壊で、バースト発動！」

「！」

バーストが発動し、裏向けにされていたカードがオープンされ、そ
のカードは……！

「風の霸王ドルクス・ウシワカ！バースト効果でスピリットを二体
疲労！さらにフィールド、リザーブ、トラッシュにコアが8個以上
ある場合、このスピリットを召喚する！」

「！」

バースト発動で、カードから風が放たれ、その風は後ろに居るリザ
ドエッジ、魔龍帝ジークフリードの周りに集まり、リザドエッジは

地面にもたれ込み、魔龍帝は片膝をつき、疲労してしまう。

「くそっ！」

「行くよ、疾風となりし霸王よ、全てを吹き払う嵐となれ！緑の霸王（ヒーロー）×レア、風の霸王ドルクス・ウシワカLv.3で召喚！！」

ダーククリムゾンが投げつけた槍は、フィールドに巻き起こった台風によって弾かれ、その台風の中にあるエメラルドは砕け散ると、そこから風の霸王ドルクス・ウシワカは台風を振り払い、翼を羽ばたかせながらゆっくりと地面に降り立つ。

「そしてダーククリムゾンの攻撃はドルクスがブロックします！」

ドルクスは鳴き声を上げながら、ダーククリムゾンへと向かい、ダーククリムゾンはそれを迎え撃とうと何度も何度も火球弾を放っていくが、ドルクスは光のような速さでそれを全て避けると、ダーククリムゾンの目の前まで迫り、足の爪でダーククリムゾンの両翼を掴み、そのまま地面へと急降下し、勢い良くダーククリムゾンを地面へと叩きつけると、ダーククリムゾンは大爆発を起こし、破壊される。

「うっ、嘘……」

あまりの衝撃で英の手札はパラパラと、手元から落ちていく。

第8ターン。

「じゃあそろそろ決めますよ」

メインステップまでの準備を進め、コアは12、手札は7枚となる。

「もうスピリットは必要ないですね、アタックステップ！」

「うっ！！」

「ブラックマッハジーでアタック！」

「ら、ライフで受けるしか……ひいつ！」

いつの間にかブラックマツハジは直ぐ目の前まで迫り、ブラックマツハジの突進でライフは砕かれる。

「ぐわぁっ！」

「これで最後です。ドルクス、幕引きをお願いします」

ドルクスは咲の方見て、咲の言葉に返事をする、翼を羽ばたかせながら英へと向かう。

「ら、ライフで……！」

ドルクスはフィールドで疲労しているリザドエッジと魔龍帝の頭上を通過しながら英へと迫り、残り一つとなったライフを翼で一気に砕く。

「負けたぁ……ッ……！」

『さあ、一回戦最後の試合、勝者は木野咲選手！熱いバトルを展開してくれた二人に盛大な拍手を！』

観客達は戻ってきた咲達に盛大な拍手と歓声を送る。

「嘘だ嘘だ！俺が初戦敗退だなんて！！ありえねえーーーーッ！！」

よっぽど受け入れがたいのか、英は泣きながら逃げるようにその場を立ち去っていく。

「咲、やったな」

「和人、応援ありがとう。何とか勝てたよ」

よっぽど疲れたのか、まるで疲労したスピリットのように座り込む咲を和人とリクトは慌てて支える。

「にしてもすごかったぜ、あの試合に逆転するなんてな」

「風の霸王、ぜひ俺のスピリットとのバトルが楽しみだ」

「あつ、リクト君も見てくれてたんだ。にしても、相手も強かったから負けるかと思っちゃった」

「何言っただよ、もっと自信持てよ。もうお前の実力は本物だよ」

「和人……ありがとう。でも戦うときは絶対に負けないからね」

「ああ」

『さあ続く二回戦！早速対戦カードをシャッフルだ！！』

「「！」」

ギャラクシーの言葉が響き、全員モニターを注目すると、二回戦最初の試合では和人とあの相崎光と言う女性の姿が……。

「！、二回戦の相手、あいつか」

「和人、知ってるの？」

「まあな。でも咲の試合見てたら俺も負けてらんねえ、二回戦俺は絶対勝ち進むぜ！」

「おっと、それは俺も同じだぜ？」

「私もね」

和人の言葉に、リクトも咲も笑いながら言う。

「二回戦、次の試合では絶対お前に会いたいぜ、カタストロフ！」

和人はデッキの中の一枚、激神皇カタストロフドラゴンのカードを見ながらそう言った。

「次の試合、対戦相手は和人さん、ですか」

和人達より少し離れた場所でもモニターを確認する光。

「二回戦、楽しい試合を期待してますよ」

デッキの中の一枚、月の霸王のカードを持ちながら彼女は笑みを含めて、そう言った。

第9話『風の霸王vs魔帝龍騎』（後書き）

いかがでしたか？今回初めて咲がバトルフィールドで戦う姿を書きました！

彼女が扱う緑デッキ、今回の対戦相手はダーククリムゾンを使うチャラ男、樋田英でした。

負けたら彼女となる条件だったものの、何とか勝利！まあ負けたら負けたで樋田の彼女となった咲の今後を書くのもそれはそれで面白いと思うような（笑）

そして今回彼が使ったダーククリムゾン。やはりその効果は絶大、魔龍帝との二大タッグはやはり強力な組み合わせです。

そして今回の最強カードは風の霸王ドルクス・ウシワカ！
相手による自分のスピリット破壊でバーストが発動し、バースト発動時でスピリットを二体疲労させ、さらにコアが合計8個なら召喚可能。

神速も持っているので風の霸王はとても強力な一枚。デッキ強化に必ず役立つ一枚なのは確実です。

そして今回は和人と光が対決！
バトルではあの霸王と、虚神が激突！！

次回『来たれ！月に輝く霸王！！ルナアーク・カゲヤ』
今後もこの小説ぜひよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6404x/>

バトルスピリッツ 激震の勇者

2011年12月26日22時53分発行